S O T O 禅 インターナショナル

発行日　2007年12月20日　　発行人　福島伸悦
編集責任者　淺井宣亮　　編集担当　内山温子　　編集委員　舘盛 亀野 太田 菅原 細川（浩）篁　赤間 さとう
発行所　SOTO禅インターナショナル事務局　〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3 貞昌院内
Tel.　045-843-8852　Fax. 045-843-8864　　URL: http://www.soto-zen.net/
郵便振替　00100-6-611195　SOTO禅インターナショナル

Vol.36

南米・現職者講習会

CONTENTS

●巻頭　「坐」の布教 …… 曹洞宗北アメリカ国際布教総監　秋葉　玄吾　1
●ＳＺＩ国際布教支援積立金運用報告　～受給者レポート～ …… 大雄山最乗寺雲衲　禅心　2
●特集　宗教間対話研究所定例会・講演録 …… 6
●海外レポート　第７回　北米ハワイ檀信徒大会レポート …… 曹洞宗北米別院禅宗寺　小島　秀明　10
●国内レポート　～平成19年度聖護寺国際安居レポート～ …… アンカレッジ禅コミュニティー主管　フランズ　幸雲　12
第８回夏期大学講座「禅といま」開催に協力して …… ＳＺＩ事務局員　菅原　研州　13
「天平の響き　シルクロード・音楽の旅」 …… 14
第９回ゆめ観音アジアフェスティバル in 大船 …… ＳＺＩ事務局員　内山　温子　17
●ＳＺＩ創立15周年記念行事にむけて …… ＳＺＩ事務局長　亀野　哲也　20
●海外寺院ガイドブック発行について …… 22
●特別寄稿　「平和を祈る」 …… 曹洞宗総合研究センター研究員　丸山　劫外　23
特別寄稿　「東南アジアの中のタイ仏教」 …… 日本大学文芸学部教授　此径　啓助　24
●海外インフォメーション …… 27
●ＳＺＩ通信　会費納入単・動静報告・ウェブサイトの告知・読者メッセージ …… 31
●2008年度 総会・講演会のご案内 …… 32

巻　頭

「坐」の布教

曹洞宗北アメリカ国際布教総監　秋葉（あきば）玄吾（げんご）

「SOTO禅インターナショナル」の会報は、常に拝読させていただいています。人材豊富な同会の活動は年々盛んになってきており、慶賀すべきことであると感じています。

海外で、実際に国際布教の第一線に立っている者として、「SOTO禅インターナショナル」が、その活動を展開していることを頼もしく、また有難く感じています。

2007年5月の、同会主催の両大本山におけるワークショップ・講演会は、成功裏に終えたと伺っておりました。先日の会報に掲載された、「両大本山ワークショップアンケート全文」に目を通し、そのことをより実感させていただきました。両大本山の修行僧の方々に対し、大いなる国際布教啓蒙となった講演は、同会における活動の好例であると言えるでしょう。

「こころざし」を抱いた若い宗侶が、自己の寄って立つ基盤を確立し、国の内外に関わらず経験と苦労を積み、逞しく新鮮な布教を展開していくことは、今の世の中の人々が心から求めていることではないでしょうか。アンケートからは、両大本山の修行僧の方々が講演の中で、そのことについて敏感に感じとっていたものと思いました。

世界はとても広く、実に複雑に出来ています。しかしながら、しばしば言われるように「個々人のいのちはひとつ、誰でもが同じいのちである」。その「いのち」より世界は成立しているのです。

「ただ息をして此にある」坐禅が、「だから、畢竟世界は単純、ひとつのこと」と、教えてくれています。そして、どの国の人も、「ただ息をして此にある」坐禅は実修できるのです。坐禅は、「人間の喘ぎの止んだ世界に落ち着くことであり、いじましい現実的自己はそのうち消失してしまい、悠久の天地へ自己を解放することである」と、先人は教えてくれています。

どの国の人にも、いのちの真の実相を知ることは歓びでありましょう。

以前、「世界は粥で造られてはいない。君等は怠けてぐずぐずするな、固いものは噛まねばならない。喉が詰まるか、消化するかだ。」と教えて下さった老師がおりました。

我々宗侶にとっては、どこに居ても功夫専一、「坐」の布教が自己の寄って立つ基盤であります。SOTO禅インターナショナルの皆様とともに、この基盤を強固ならしめる活動が出来ることを期待して止みません。　合掌

ＳＺＩ国際布教支援積立金運用報告　～受給者レポート～

親愛なるＳＺＩの皆様へ

大雄山最乗寺雲衲　**禅心・レニオ・エドゥアルド・カステロ・ブランコ・アンドラーデ**

■ はじめに

諸仏諸菩薩に帰依し、我々皆共に健康で心静かな修行ができることを感謝いたします。

私の名前は禅心・レニオ・エドゥアルド・カステロ・ブランコ・アンドラーデと申します。

1973年9月3日、ブラジル東北地方のピアウイ州の州都テレジーナで生まれました。34歳の誕生日をこのすばらしい国、日本で迎えました。母親の名はオンディナ・マリア・チトー・ブランコで既に引退生活をしています。父親の名はレナト・ポルテラ・アンドラーデといい、既に亡くなりましたが農業技術者で、28年間に亘りブラジル連邦政府の重要な部局の一つである開発監督庁の局長を勤めていました。

開発監督庁はブラジル北東部の旱魃被害を最小限に食い止めるためにつくられた部局です。私はこの両親の元で尊敬心・責任感・平和・同情心などの基本的な倫理観を育まれ、それらが私の教育の基礎となったことを幸いに思います。父親が早く亡くなったため、16年前から家族の生計を支えています。又、私は早く結婚したため2人の娘がいます。一人は現在14歳で私と一緒にブラジルに住み、もう一人は11歳で母親と共にイタリアに住んでいます。

私の住むテレジーナという都市は人口約80万人、ブラジル北東部では最も静かな都として知られ、果物と穀物の生産地として有名です。テレジーナ市のあるピアウイ州は世界で唯一の海に面したデルタ地帯で知られています。よって、そこには非常に稀な植生と様々な生物たちが棲息し、数え切れないほどの魚と海産物が獲れます。たとえば、カニはブラジル全土のみならず多くの国々に輸出されています。（注：このデルタ地帯は非常に広大で、土地は肥沃、多様な川や砂丘・海もあります。）

州内の南部には自然遺跡、カピバラ山地国立公園があります。ここで約24万年前の遺跡が考古学者たちによって発見されました。現在、アメリカ大陸で最も古い人類の遺跡です。そこにはこの仮説を肯かせるたくさんの原始的な壁画や道具類が発見されています。すばらしいところです！もし私の故郷に興味をもたれる国際布教師の方がおられたら私の家を提供します、お使い下さい。

■ 禅との出会い

私はピアウイ州立大学の歴史学科を卒業しました。専攻は政治史です。帰国したら、2008年より大学院修士課程に入り宗教史を学び、最終的には“南米における禅修行の効用と影響について”の論文を書く予定です。又、大雄山最乗寺での曹洞宗の禅僧としての修行と経験、私のブラジルで計画していることなどを一冊の本にして出版するつもりです。

私は1989年、ある浄土真宗僧侶に勉強会へ参加することを勧められたことにより仏教の勉強と修行を始めました。その後、6年間に亘り浄土真宗の数人の僧侶を招き勉強会を続けました。そのうち我々の小さなグループにもサンパウロにある別院から援助があり、ブラジル本部との交流が始まりました。そんな関係で私は奨学金を与えられ日本で浄土真宗の勉強をすることができました。しかし、私は他の仏教宗派についても興味があり研究をしていました。そして解ったのです。西洋社会に浄土真宗の教えを理解させ伝えることは非常に難しいということを。それ以後、私は浄土真宗との関係を一切断ち、奨学金を受けないことにしました。

その後も私は個人的に仏教の勉強を続けておりました。そして1994年、ブラジル、エスピリット・サント州イビラスーにある曹洞宗の禅センターで5日間の摂心に参加、道元禅師の教えと坐禅こそが私の求めていたものであり、西洋社会でより多くの人々に広めなければならない教えであることを強く感じたのです。

大雄山最乗寺にて・右端禅心師

2002年私はサンパウロに旅行した際、ブラジル曹洞宗の本部である仏心寺を知ることとなりました。そしてブラジルに曹洞宗の教えを広めようと一生懸命努力しているソーザ孤円先生と出会いました。同年、私は故郷で坐禅会を始め、仏教協会を設立いたしました。

2005年、禅僧となってより深く修行したほうが良い、とのソーザ弧円先生の勧めがあり、南米総監であり仏心寺住職である采川道昭老師を紹介されました。2006年10月7日采川総監の元で得度を受け彼の弟子になりました。そして、師匠の要請を受け、曹洞宗の正式な僧侶の資格を得るため最乗寺専門僧堂に入った次第です。

ここでの修行は私にとって非常に重要です。私は僧堂での規則正しい生活を指導している担当の皆様に歓迎されております。本当に皆さんに感謝申し上げたいです。特に石附山主老師と後堂の山田老師には私の修行を許して頂き有難く思っております。私は日本語が解せず言葉の困難があるにも関わらず、僧侶として必要な様々な活動や役割を学んでおります。特に曹洞宗の宗侶として最も大切な心の持ち方（正思）を会得することができました。ブラジルに帰ってからもこの修行を続けるつもりです。そして法戦式を済ませ、また日本に瑞世のため来るつもりです。

現在、サンパウロ別院仏心寺はより大きな建物にするため、大規模な増改築工事をしております。帰国後は、たぶん私はそこに住み、采川老師が総監としてブラジルに赴任している限り、彼から教えを学び、近くにいて一緒に働くことになると思います。私は采川老師のような坐禅修行に熱心で、直接的でしかも簡潔な言葉を用い、エネルギッシュに仏法を伝える真の禅匠と出会えたことを大変幸運に思います。

■ 故郷ブラジルでの仏教協会の活動

現在の我々は、地球上の生命すべてが危機的状況にある、という未曾有の大問題を抱えております。我々一人ひとりがこの状況を何とかしなければなりません。西洋での仏教の重要な役割は、他の宗教や組織と手を携えて、原子爆弾使用の悪夢・環境汚染・リサイクル不可能な物質の継続的大量使用、などによる生物の破滅をなんとしても防がねばならないことです。我々は世界中の飢餓・貧困・圧制と戦っている人々を物質的にも精神的にも支援しなければなりません。我々は怠けてなどいられません、なぜならすべての存在は互いにつながっているからです。いや、我々は一つの体、一つの命なのです。我々は網の目一つの存在です、現在生きている世界に共同責任があります。変革は今・ここから始めなければなりません、待ったなしです。

故郷での私の曹洞宗僧侶としての活動をご紹介いたします。私達は10人で組織した仏教協会で一軒の家を借り、そこを道場として毎日、経行を入れた２炷の坐禅を行い、それから朝課を行っています。また、月に一度、2日間の摂心をします。毎週土曜日は子ども向けの坐禅会です。そこでは人形を使いながら仏教のお話をします。日本に来る前には市役

SEDE DA Associaçón BUDISTA

道場のメンバー

所で２つのプロジェクトを立ち上げました。

１つ目として州の刑務所で60人の受刑者を集め４回に分けて初歩的な坐禅会を行ないました。これはブラジルではまったく初めてのことで、我々にとっても大きな挑戦でした。２つ目は下層階級の子どもたちが多い公立学校で子どもたちに坐禅をさせるものです。公共機関に頼っているばかりではありません、我々はボランティア活動として貧困層の多い様々な町に出向き“太陽熱を使ったオーブンの作り方”を教えています。このオーブンは太陽熱のみを使ってご飯・野菜・肉などを調理する道具です。

この方法によって多くの家族が助かっております。また、次に挙げる理由で地球自体に有益であると思います。１）家庭用ガスを使用しないため、家計が助かる。２）薪を使わないため、薪を集めるための女性の労力を減らし、さらに薪の出す煙を吸わないため肺の病気を減らすことができる。３）森林の荒廃を避け、広い面積の森林を守ることができる。４）学校に通う子ども達が、薪を集めそれを遠路運ぶ仕事から開放され、多くの勉強時間を得ることが出来る。５）料理の支度に手間取らない。なぜなら、家の中で料理をしていると絶えずそれに気を付けていなければならないが、この方法だと屋外の太陽の下での料理なので火の管理をする必要がなく、また料理を焼け焦がすことがない。６）食物の栄養も味も遜色なく十分に保たれている。

このオーブンで料理を作っている間、私は禅についての話をし、坐禅の時間も設けます。ブラジルは伝統的にキリスト教の国です。しかしながら、これらの手段を用いることにより尊い仏教の教えを説くことが出来、そしてブラジルの大地に仏教を広めることが出来るのです。

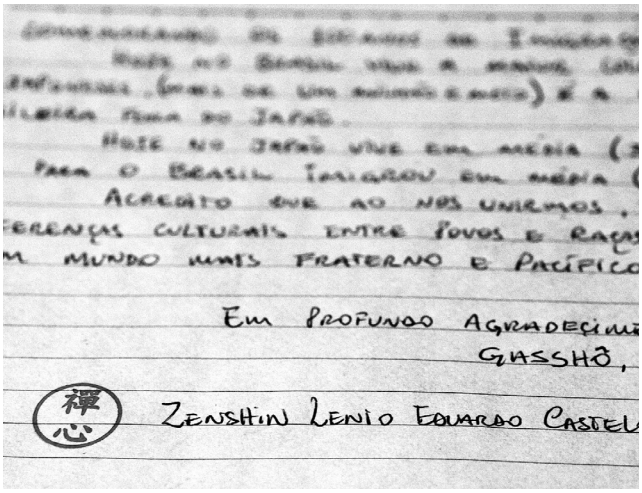
■ 最後に

社会的にそして経済的にブラジルは日本とは大変違います。ブラジルは多くの失業者を抱えておりますし、低所得者による社会的暴力など多くの問題に直面しております。我々はこれらの問題を勉強し乗り越えていかなければなりません。

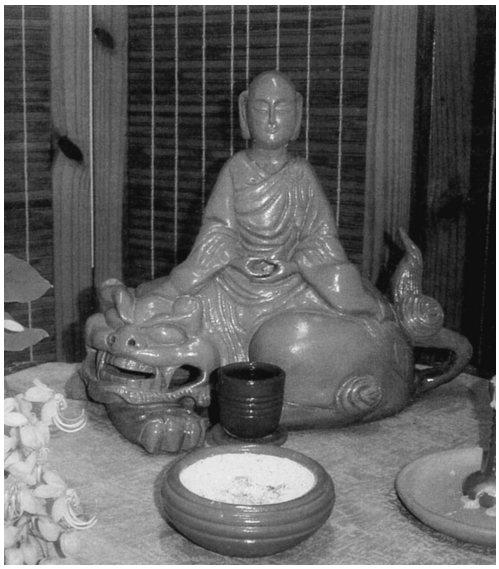
今回短期間ですが大雄山最乗寺に来たことにより、私は大学院の修士課程の勉強を中断しなければなりませんでしたし、学校での歴史の教師職も投げ出してしまいました。よって収入の道は閉ざされております。

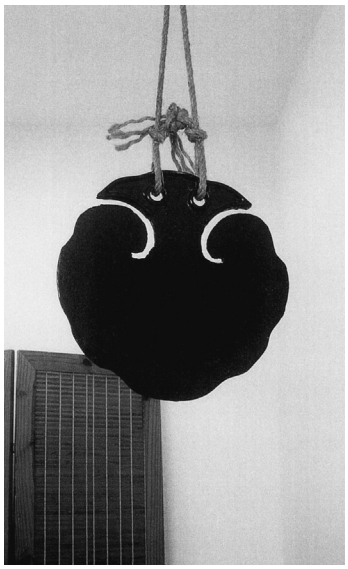
しかし、幸いに今回ＳＺＩより奨学金を得、大雄山から支給される毎月の衣資料を貯めることにより、なんとかブラジルに帰るための飛行機代はまかなえそうです。私はわずかなお金しか日本にもって来ませんでしたが、真面目に修行するための強い意思と肉体を持ってきたことを皆さんにお知らせしておきたいです。

実は、ブラジルの仏教協会で使用している木魚は私が彫りました。太鼓は一人の友人が作りました。雲版は金属板を高温の電気バーナーで切ったものです。ある友人は粘土で聖僧様を作りました。我々にはまだ観音像、道元禅師像、瑩山禅師像がありません。また引磬・磬子・殿鐘もありません。これらに加えて仕事の効率を上げるため、そして曹洞禅をブ



手書きの報告書





ラジル北東地方に広めるためコンピューターも必要であるというのが仏教協会の現状です。

来年2008年は、ブラジルと日本の両国政府の合意により初めて日本人がブラジルに移民し、文化交流が始まってから丁度100年目の記念すべき年です。今日のブラジルには日本を除けば最も大きな日本人社会が存在し、移民者の子孫を含めると150万人以上が住んでいるといわれております。また、日本には31万人のブラジル人が住んでおり、その内20万人は日系人だそうです。私は共に助け合うことができれば人種間の文化の相違は乗り越えられると信じます、そして、それにより私達は真に平和な世界を作り上げることができると思うのです。

— 深い感謝と敬意の中で —

合掌

（この原稿は手書きのポルトガル語をサンパウロ別院にて英訳、ＳＺＩ・加藤孝正により和訳しております。）

ＳＺＩではブラジルの禅道場へ仏具を寄贈したいと考えております。寄贈にご協力いただける方はＳＺＩ事務局まで送付ください。

～2008年度「国際布教支援積立金」申請受付のご案内～

応募資格：　曹洞宗の国際布教事業に携わる国内外の寺院、団体、個人
支 援 額：　年度総額 100 万円
問 合 せ：　SOTO 禅インターナショナル事務局

◎申請方法
申請用紙（事業計画書の添付用紙）はＳＺＩのホームページ
http://www.soto-zen.net/　からダウンロードしてください。
申請先：〒 233-0012　横浜市港南区上永谷 5-1-3　貞昌院内　SOTO 禅インターナショナル事務局

◎交付実績　(2007/5/28 現在)
2006 年度　2 件（2 名）　　2007 年度　3 件（1 名＋ 2 箇所）

特集　宗教間対話研究所定例会・講演録

「宗教間対話研究所」概要と設立までの思い

群馬県長楽寺住職　峯岸正典（みねぎししょうてん）

平成17年から検討に入り、翌18年1月29日付けで自坊内に宗教間対話研究所を設立しました。SOTO禅インターナショナルの皆さんにも仲間になっていただいております。幼いころから、世の中に異なった宗教が存在し、それぞれが真理を主張していることにこだわりがありましたので、私個人にとりましてはごく自然の成り行きでありました。ただ、いくつかの伏線ときっかけがあったことは確かです。

いろいろな宗教間対話に関するお誘いや相談を以前から個人的に受けておりました。あるとき、伝統を異にする集団からご招待がありました。重要な取り決めを行う部屋で全員が法服で正装していました。そこに私が入りますと中から鍵がかけられました。このときはびっくりしました。そしてその団体の在り方に対する助言を極めて厳粛な形で求められたのです。この感銘がきっかけとなって、暖簾を下げて看板を出した方が、より皆さんのお役に立ちやすいのではないかという想いが強くわいてきました。

また平成17年3月に東京で開かれた「国際宗教学宗教史会議第19回世界大会」の総合テーマが「宗教―相克と対話」とあったことも契機となりました。5年に一度開かれるこの世界大会は「宗教研究者のオリンピック」と言われ、権威のあるものですが、その中心課題に宗教間の対話が取り上げられたことは、一昔前までは考えられなかったことであります。この会議が設立されてから57年が過ぎようとしておりますが、これまで一度も宗教間対話が総合テーマとなったことはありませんでした。察するに、イスラム勢力の台頭とともに異なった宗教に属する人たちの葛藤が一層無視できなくなり、現代社会の大きな課題になっています。学会といえども社会の動向を反映しておりますので、宗教間の「対話」が国際大会のキーワードになったと受け止めました。つまり宗教の違いについて、みんなで考える「場」を用意することができる時代になったと思います。

最後に年齢のことをあげたいと思います。私も50歳を過ぎてから、人生の締めくくりを考えるようになりました。「これからは、好きなことだけをやりたい」というわがままな思いとスティーブ・ジョブズ（アップル・コンピューター創始者）の「今日が人生最後の日だとしても、今日する予定のことをしたいと思うか」という言葉が重なり合いました。やりたいことを極めてロスの少ない形で実行したい。かといって恣意的な組織にはしたくありません。くわえて、研究所を旗揚げすることにおいて痛くもない腹を探られるのも嫌なので、宗教法人長楽寺付属「宗教間対話研究所」を設立することにしたのです。もちろん総代の了承を取り、世話人会議の決議をいただきました。宗教間対話研究所の目的は「宗教間の対話と相互理解の促進に努め、世界の平和に寄与することと、異なった宗教・文化間で円滑なコミュニケーションを確立するための方法論を探求し、提案すること」でありますが、田舎の普通のお寺の付属機関としてはやや大上段に構えすぎているところもあります。地域に貢献することも大切なので、合わせて「悩み事相談所」も開設いたしました。一寺院ではありますが地域の皆さんの心の安定と世界の平和に貢献しようとすることは公益法人としての責務を全うすることにつながっていくと考えています。毎月第3木曜日に曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）で月例研究会を開いております。

詳しくは「文化時報」(2006.2.11発行)と11月発行予定の『中央評論』(中央大学出版部)における「我がこととしての宗教間対話」をお読みいただければ幸いです。

例会のご案内

宗教間対話研究所例会は、毎月第３木曜日18：00～　曹洞宗檀信徒会館（東京グランドホテル）において月例研究会を開いております。参加ご希望の方は　宗教間対話研究所　0274－84－2518（長楽寺内・峯岸）までご連絡ください。

どのような内容で例会が開催されているかのご紹介を宗教間対話研究所例会の参加報告としてＳＺＩ事務局スタッフよりさせていただきます。

第３回 宗教間対話研究所例会報告

「現代社会における宗教意識と諸宗教対話の現況」

8月30日（木）18：00～20：00

講　　師：南山大学人文学部教授・南山宗教文化研究所第一種研究所員・人類学研究所長
渡邊　学先生

第２バチカン公会議（1962－65）以降、カトリック教会には1つの大きな転機が訪れた。この会議の画期的な点は、「これらの諸宗教〔ヒンドゥー教、仏教、イスラム教、ユダヤ教など〕は、教会が保持し、提示するものとは多くの点で異なっているが、すべての人を照らす真理の光線を示すこともまれではない」ことを認めたことにある。南山宗教文化研究所は、この第２バチカン公会議の精神に基づき設立されたものである。

（１）宗教学の観点から見る現代社会の３つの特徴

① 世俗化の流れ・・・宣教主義から諸宗教対話へ

中世以降、教会に委ねられていた公教育・社会福祉の役割が国家へ移動、これに平行して科学的世界観が一般に浸透・常識化し、19世紀末から20世紀にかけて自然学的世界観と宗教学的世界観との対立が起こった。科学的な真理を宗教でどう扱うかという問題に対し、欧米ではスピリチュアリズムが興隆した。

アメリカでは20世紀初頭に、「聖書には矛盾はあるが現代人に対するメッセージとしての再解釈に心を及ぼすべきである」とする『自由主義神学』の是非をめぐって、米国長老教会を中心に重大な教義論争が戦わされた。この自由主義神学の『メインライン（主流各教派)』と、キリストの処女降誕・神性・奇跡・贖罪死・復活と再臨という伝統的な５つの根本教義を堅持する『ファンダメンタリスト(福音派)』とに教会は二分される。20世紀の主流にあったメインラインは、リベラリストの民主党派閥であり、北米における多数派として政治的な主導権をも有していたが、60年代、ベトナム戦争の頃より、瞑想・環境保護・ロック・麻薬・反戦平和・性の解放などのカウンターカルチャーが社会現象になるにつれて、その影響力は低下。イラン戦争以降、強いアメリカが主張される共和党の時代となり、字義通りの信仰を堅持しようとし比喩的な解釈を許さない、原理主義がこれに代わって台頭してくることとなった。

このような流れの中で、カトリック教会におけるリベラルな動きとして第二バチカン公会議が開催されたわけであり、この会議を転機として、カトリックでは宣教主義（「未開の地に神の真理を伝える」ことを目的とする）から諸宗教対話への大きな方向転換が成された。1979年、カトリック教会と禅宗の協力によって『東西霊性交流』が開始され、修行・

修道による相互の霊性（スピリチュアリティ）の交流が行われるようになった。1982年には東西宗教交流学会が設立されている。また、同会議以降、Buddhist-ChristianやJubu（Jewish Buddhist－アメリカの仏教徒の30％近くがユダヤ人であるといわれている）などの習合信仰に近い動きも見られた。

② 宗教の私事化、代替宗教、消費文化としてのスピリチュアリティ

現代社会の特徴として、まず、宗教の私事化があげられる。宣教主義をプライバシーを侵すものであるとし、宗教を私的な営みとして捉える方向性が一般的となったため、現代では宗教家による積極的な布教活動が行われなくなっている（一方では積極的な布教活動による新興宗教が発展）。個人の健康や精神的な安定を目的にしたヨガ・禅・巡礼・修験道・写経・マンダラ塗り絵など、プライベートな生活領域での宗教アレンジという方向性や、代替宗教としての心理学やセラピー、セミナー、また昨今のスピリチュアルブームの流行など、対価を払ってスピリチュアルなものを消費するある種の消費文化の構造が顕著化。人々は、既成教団へのコミットメント以外の選択肢を求めて、自己イメージを高めるための消費行動に走っているわけである。

③ カルトと呼ばれるものの広がり

現代のカルトの分類として、オーディエンス・カルト（講演会などへの参加、チャネリングのセッションなど）、クライアント・カルト（セラピストや占い師などの顧客が集団を形成）があるが、いずれにしろ運動体として成立したものがカルト団体となって広がっている。

（2）現代日本人の宗教意識

一般的に「日本人ほど世俗的な人間はいない」といわれているが、統計を取ると、70～80％が初詣・墓参りなど何らかの宗教行動をとっており、宗教所属人口は170％という事になっている（文化庁、2002年末現在）。これは、日本の伝統的な村落共同体の中での血縁（家父長制）や地縁という人間関係と、江戸幕府の寺請制度・明治政府による一村一社制など歴史的な制度の影響によるものであるが、都市集中型に日本社会が変化している現代においては人間関係が希薄化しており、少子化により血縁に基づいた先祖供養や先祖祭祀の継承は困難となり、また都市化により地縁に基づいたそれぞれの土地に根ざした産土信仰は弱体化されている。急激な産業化、都市化に伴い、都市での生活は孤独化し、新宗教やカルト的な団体がつけいる隙が発生。先祖代々の墓の維持は困難となり、個人墓の建立・コインロッカー型の納骨堂の利用の増加などの現象が起きている。少子化、都市化による伝統宗教の衰退、宗教的な空白状態の中で、個人的な自己意識と社会秩序との間に亀裂を体験しているような現代人は、自らのアイデンティティーを求めて「自分探し」をせざるをえなくなっており、このような状況の中で宗教的浮動人口が生じており、そこに新たな宗教運動が入り込む余地が生まれている。　（文責・さとうのり）

第4回 宗教間対話研究所例会報告

「宗教間対話と公共哲学
――成熟期を迎えた宗教間の対話――」

9月20日（木）18：00～20：00

講　　師：新日本宗教団体連合会事務局長
　　斉藤謙次先生

■ 講義の概略

宗教間対話（註）そのものに関しては、宗教者同士が単にイベントとして会って話をするだけだ、と

いったようなイメージが定着するなどマンネリ化も見受けられるが、日本国内では地域や町単位で対話が行われはじめていることに注目したい。長崎などは特に、被爆した場所ということから説得力あるメッセージをもって対話に取り組んでいる。函館ではロシア正教との対話など地域条件をいかしたもの、あるいは曹洞宗からも参加した教団付置研究所懇話会(2002)、京都・比叡山での宗教サミット(2007)も、その事例である。また海外においては、米国での万国宗教会議（1893)、東西霊性交流が対話の歴史として重要ではないだろうか。

平和の実現についての高い関心は冷戦時代の反動からくるもので、いわゆるグローバリゼーション時代の現代社会の特徴でもあるが、「宗教」は、これまでどうしても公と私でいうところの私の領域に追いやられている。しかし、そもそも公・私という二元論ではなく、「公共」という新しい領域が出現すべきであって、宗教はその公共領域でこそ、平和や福祉などの普遍的・地球的公共善をもとに、人類社会が抱えている諸問題に対し、どのように何が貢献できるのか、各宗教は自己を絶対化することなく真摯に考える必要がある。

国家が絶対のものでなくなり、社会、人間も相対化される現代は、もはやどの宗教にとっても他の宗教を無視できない時代である。相互の認識理解はもとより、倫理問題（脳死や臓器提供など）の解決のために知恵を出し合う際はお互いの協力を必要としていて、批判しあっている場合ではない。また、グローバリゼーションの拡大によって、一人ひとりの意思に関わりなく、どの宗教集団も地球規模の相互交流の流れに組み込まれつつあるなか、一般市民の側も市民倫理のあり方を問われてくる（例えば人を殺さない、物を盗まないなど「戒」にあたるもの。Golden Ruleを守るということ)。宗教者や一般市民双方が、対話そのものを宗教間だけでなく、社会の他の分野との関わりにおいて実践することで、地域、国家、世界、さまざまなレベルでの新しい共通倫理と価値観の創出が可能になるだろう。

（文責・内山温子）

■ 質疑応答にて

≪感想・質問≫

＊英国・バーミンガムの事例（教会の建物がモスクと化していく中、移民との共存において対話をどうするのか）が印象的。

＊公私の「私」は聖職者がよく使う言葉「世俗」をさしている？

＊宗教間対話のイベント自体は不要ではないと思う。

＊“Golden Rule”を共有するという理念は、実際の運動に移していく場合に限界はないだろうか。

≪回答≫

＊イスラエルとパレスチナの事例⇒共存不可能といわれるが、普通に生活している人たちがいる事実がある。牛とヤギの交換（モノの売買）自体がすでに公共的対話であり、このことにこそ注目していかないといけない。

＊公私の「私」は世俗ということではなく、聖も俗も含まれる。

＊どの宗教にも、いつも保守的集団と革新的集団が混在していることに注目すべき。

＊最も問題になるのは、やはり言葉の壁だと思う。平和、peace、shalom･･･etcそれぞれの言語での意味あいがニュアンスとしてしっかり共有できないとき、対話はとても困難になる。

（註）南山大学宗教文化研究所では、このような各地の対話事例についての詳細を分析し、Annual Reportを提出している。

参考文献

星川啓慈他, 2005,「平和を求める宗教間対話の実践と課題」『現代世界と宗教の課題――宗教間対話と公共哲学』蒼天社出版, 69-110.

2,200円＋税
ISBN：9784901916066（4901916068）

… 海外レポート …

第７回　北米ハワイ檀信徒大会レポート

曹洞宗北米別院禅宗寺　国際布教師　小島秀明（こじましゅうめい）

この紙面には久々の報告となります。今回は10月20日・21日の両日に渡ってネバダ州ラスベガスにて開催された第７回北米ハワイ檀信徒大会の模様をレポートします。

この檀信徒大会は今回で７回目。諸般の事情で二年以上の間があいた事もありますが、基本的には隔年で北アメリカ開教区とハワイ開教区の持ち回りで行われています。今年は北アメリカの担当でサンフランシスコ桑港寺が担当寺院となって企画開催されました。

場所はカジノで有名なラスベガス。日本でも有名です。なかには、なんでそんなところで仏教徒の催しをわざわざやるのか？と首を傾げる方もありますが、現在のラスベガスはコンベンションや大きな会議のメッカとしても有名になっています。ホテルや会議施設など低料金で多くの人員を収容できますし、会議が終わった後のエンターテイメントも事欠きません。

沢山の一般檀信徒に参加して頂きたい檀信徒大会では､安くて楽しいこの場所が一番人気となっています。ちなみに前々回の檀信徒大会もラスベガスで行われました。と、前置きが長くなりましたが、大会の中味を報告いたします。

20日（土）初日は午後からスタッフ会議、６時から歓迎晩餐会が開かれました。ハワイより僧侶７名を含む50名、北米から僧侶11名を含んで51名、南米からは采川総監と越賀師の２名、日本からの福島ＳＺＩ会長ご家族、その他ゲスト等を含め、総勢111名の晩餐会となりました。各テーブルはハワイと北米の方々が程よく交わって坐るスタイルで、旧交を温めたり、新たな親交を楽しんだりと終止和気あいあいのうちに終わり、食後みなさんは各自カジノへ繰り出したり、別席を設けたりと楽しい夜を過ごしました。

二日目の朝。大会は９時からの開講諷経で幕を開けました。秋葉玄吾北アメリカ総監導師にて、英語の般若心経と回向で勤められましたが、参加者の中には英語でのお経を初めて経験された方も多かったのが印象的でした。

引き続きカリフォルニア大学バークレー校の仏教学の教授､ウィリアムズ隆賢ダンカン師の基調講演が「仏教東漸」と題して行われました。

ウイリアムズ隆賢ダンカン師

師は、これからの仏教が西洋文化に新しい視野を与えていく事を、インドから東南アジア、中国、韓国、日本、そして現在ではアメリカやヨーロッパへ伝播されてきた仏教の展開が表しているとして説明。地球、世界が置かれている現在の状況に現実的に向かい合い、どう進んで行かなければならないのか。それを、地球を大きなサンガと捉え、人間だけではなく生きとし生けるもの全てが繋がっているという仏教の考え方。両極端に偏らない中道の考え方などを通して、西洋の人々が今､仏教的新しいビジョンで見始めている。と結んでいました。

ビュッフェ形式の昼食を挟んで、午後からは三つの分科会に別れてディスカッションが行われました。それぞれに檀信徒の代表が司会進行や書記などの役割を担い、活発な意見交換がされましたので、その概略を紹介したいと思います。

まず、第一部会。テーマ「将来に向けた寺院運営に関して」では、司会の葉柴キャロライン禅宗寺理事長が寺院の運営と経済的側面から幾つかのトピックをあげ、それについてハワイ、北米双方の参加者が意見を交換しました。

ディスカッションの中心は、状況が異なる個々の寺院が、それぞれにどう経済的な事や寺院運営を行っているか、また機構構造をなしているか等で、お互いの違いを通して新しいアイデアを学び、質問や説明が交換されていました。

第二部会のテーマは「これからの寺院における活動に関して」。

寺院の活動は文化、宗教、経済的な要素が繋がりあっていますので、それぞれの立場から沢山の活発な意見が交換されました。萩原タナコ女史（SF桑港寺婦人会会長・理事）が司会進行し、各寺院で現在行っている活動などを紹介し、お互いに新しいアイデアや発想を学びあいました。特に多くの参加者が若い世代の活動に興味を示し、次世代を引き入れる活動に意見や質問が集中しました。そして若い世代に魅力的である活動とは何か、また、次の世代に仏教を受け継ぐ為に自分たちももっと仏教を学ぶ必要がある事実へとディスカッションは盛り上がって行きました。

「日常生活における仏教と、その実践」をテーマに掲げた第三部会では禅宗寺理事三好ハワード氏の司会役でディスカッションが進められました。

まずはじめに、仏教教義と日本の文化的慣習を明瞭に分ける必要性が話し合われ、次に変化への対応の必要性、ケア施設への訪問等の社会的必要性や坐禅堂の中だけではない坐禅のあり方などを中心に、各個人が各々生活の中で実践している仏教が紹介されました。個々人によって仏教の受け取り方やあり方、そして生活環境も違う事から、大変難しいテーマでしたが、最終的に、仏教をもっと深く学ぶ事、そして僧侶とのコミュニケーションを持つ事の重要性を認識しディスカッションは終了しました。

午後３時半。各分科会を終えてしばしの休憩をとった参加者がメインの会場に参集し、各分科会からのレポートと質疑応答が行われ、町田、秋葉両総監からの総括がなされました。その後、町田ハワイ総監導師による閉講諷経。最後に今回の担当寺院サンフランシスコ桑港寺の舘寺規弘師のFarewell Massageで第７回北米ハワイ檀信徒大会は幕を閉じました。

私自身の檀信徒大会への参加はこれで４回目となります。他の古いメンバーさんと同様、旧友に会える歓びの比重が大きくなってきました。もともとハワイと北アメリカの檀信徒がこれからのアメリカでの布教のあり方を話し合う事が目的でしたが、それ以上に、顔を合わせて食事をし、話をする親睦の重要性を再認識しました。大会の方向性も協議して何かを決めよう、結論を出そうとする形から、お互いのアイデアや活動や情報を共有することで、自分たちのお寺の一助としようという考え方に変わってきているように感じます。

アメリカの寺院は檀信徒＝メンバーが理事となって責任をもって運営しています。この檀信徒大会も檀信徒による檀信徒の大会です。しかし、それを裏で支えているのは僧侶、国際布教師です。今回の大会も桑港寺メンバーが中心となって開催されましたが、実質的事務から人や意見の交通整理は舘寺国際布教師であり、ハワイ側は吉田国際布教師でした。また、実質的責任を負って進めてきたのは秋葉総監であり、町田総監、駒形参事です。また国際センタースタッフのサポートです。

檀信徒の方々も実質的に僧侶に支えられているのを感じ、感謝と信頼が生まれ、言葉として自然に発せられていました。日本とは違いメンバーが責任者として運営している海外寺院では、この僧侶とメンバーの関係が国際布教の原点にある事を、私自身この檀信徒大会を通して再確認できた事も、今回の第７回檀信徒大会、ラスベガス秋の収穫でした。

分科会の様子

参加者全員で

… 国内レポート …

～平成19年度聖護寺国際安居レポート～

米国アラスカ州・アンカレッジ禅コミュニティー主管　フランズ幸雲（こううん）

平成19年6月1日に、世界各地からの参加者が聖護寺に一堂に集い、第16回国際安居が始まりました。ペルー、アルゼンチン、アメリカ、そしてカナダといった海外からの真摯な参加者達は、道元禅師の教えを体験し修行するためにこの約600年前に大智禅師によって開かれ、熊本県菊池市の山奥に位置する聖護寺に参集したのです。

彼らは、家族や友達、そして慣れ親しんだ言葉や自国の文化から離れ、さらには電気さえも通っていない場所で約6週間の間、坐禅、作務、法要、托鉢、法益といった日々の行持を黙々とこなし、厳しい修行生活を送りました。

私が7年前に初めて聖護寺を訪れた時も、彼らと同じような気持ちで、ただ純粋に禅修行をしたいというだけで、それ以外に思うことは何もありませんでした。私はその時、この聖護寺での修行は、伝統ある確かな禅修行であるということは納得し理解することができましたが、その修行生活自体を受け入れることは到底できませんでした。

その理由は、坐禅の時間があまりにも長いこと、食事のペースが速すぎること、法要が多すぎることなどでした。そしてもうこんなに厳しい場所には二度と来ないと、聖護寺を下りるときに周りの人々によく話したものです。

しかしその後、実際には、私は何度もここに帰ってきております。現在はアラスカ州アンカレッジにおりますが、通訳として、そして外国人修行者を補佐し、国際安居がスムーズに運営されるように手伝いをしております。今では、ここでこのように手伝いをしながらでも、参加者と共に修行できることは、大変有り難いことであると感じております。

今年度の国際安居の最初の行持は、昨年度に続いて今年もカナダから参加の真龍師の出家得度式でした。この発心の第一歩であり、かつ厳粛な儀式は、随喜した参加者一人ひとりに深い感銘を与え、この国際安居を最後の日まで、決して気を抜かずにやり遂げようという強い決意をさせたと思います。また、数週間後には堂長の楢崎通元老師から激励をいただき、参加者の気持ちもさらに確固たるものになったと感じました。

この6週間に及ぶ安居において、参加者達は多くの困難に直面します。それは、やはりコミュニケーションの難しさや、精神力や当初の決意を持続することの難しさです。それでも外国人の参加者達は、鐘点、侍者、典座といった公務を日々こなしていくうちに、次第にまとまりをみせ、彼らの個々の意識も高まっていったように感じられました。この外国人参加者達のまとまりと結びつきは、ここ数年では、一番良かったように思えます。

この国際安居の期間、瑞応寺から臨時に派遣されていた修行僧の方々も外国人参加者達を助けながら、この安居は自分たちにとっても良い経験であるととらえ、一日一日の修行に我慢強く、そして真摯に取り組んでくれておりました。

外国人参加者の中で一番若かった人は、今年の春に坐禅を始めたばかりの22歳のアメリカ人の男性の方で、一方最年長者は、もう10年も坐禅を続けている75歳のペルーの女性の方でした。年齢も国籍も全く違う彼らでしたが、この伝統的な禅修行に全力を尽くして取り組むという姿勢は、最後まで全員が共有していました。

毎年、国際安居の最終日に、参加者達が山道を歩いて下りていくのをみると、何かが終わったような達成感があります。しかし、時間とともにその感じは変わっていきます。

アメリカ人の2人の参加者は、このアンカレッジに戻った今でも、坐禅のクラスに来る途中、街を歩いていたり、買い物をしていたりしても、いつでも聖護寺の修行僧のことを考えていると私にいいました。

国際安居が終わってすでに3ヵ月以上の月日が経ちましたが、聖護寺での修行生活は彼らの心に深く焼きついているのです。それは、山の奥深くで、修行僧がそこにいて、鐘を鳴らし、廊下を掃除している聖護寺の毎日の風景に他なりません。

国際安居の参加者達は、本当に短い期間しかそれを体験できなかったけれども、一日一日、ただ黙々と坐禅をし、修行を続けることの大切さをしっかりと理解しているのです。

そして、聖護寺は、今、この瞬間も、確かに彼らといっしょに在るのです。

（訳：SZI事務局　大谷有為）

…　国内レポート　…

第８回夏期大学講座「禅といま」開催に協力して

ＳＺＩ事務局員　菅 原 研 州

この夏期大学講座「禅といま」とは、主催が大本山永平寺、そして大本山總持寺と曹洞宗宗務庁、また朝日新聞社が後援として協力している企画である。今年で第８回となるが、元々は平成14年（2002）に行われた道元禅師750回大遠忌の文化事業であった。大遠忌が終わってからも、参加者から継続を希望する声が寄せられ、それを永平寺側で理解したこともあって現在まで続いている事業である。我々ＳＺＩが開催に協力しているのは、事務局が飯島副会長の自坊に置かれたことなどがご縁となり、福島会長と、事務局からは太田、菅原がスタッフに入っている。

今年は７月27日・28日に曹洞宗檀信徒会館で開催された。完全予約制で、両日ともに参加することが基本となっており、今年も300名強が参加している。この参加者の確保については、飯島副会長の様々な創意工夫があり、また朝日新聞社の協力（6月13日朝刊への案内掲載）などもあって、初めて実現可能な数字になっている。参加者名簿の効率的運用から、参加者への綿密なる連絡、そして何よりも企画の優秀さが参加者数に現れるのである。

ここ数回の講座は、講演が4本行われ、そして両日ともに昼食には精進料理が振る舞われている。以下は人数限定ではあるが、初日には講師やスタッフを交えた懇親会があり、両日ともに坐禅体験会（講師は藤田一照先生）が行われている。以上のような企画であるため、１回の参加費用は１人6000円である。

４本の講演であるが、今年は以下の順番であった。

・立松和平先生「道元という生き方」
・天野鐵心老師「身心学道」
・上田閑照先生「人間にとって、なぜ宗教は必要か」
・三浦信英老師「生死即ち涅槃と心得て」

ご覧になれば分かるように、今年は上田閑照先生と、立松和平先生という方が入っている。このような名のある講師の人選や実際の拝請には、講座の学長である駒大名誉教授・佐々木宏幹先生を始め、多くの先生方のアイデアが盛り込まれている。さらには、必ず法話をしてくださる御老師も拝請し、全体のバランスを取っている。講演だけでは、ただの講演会、あるいはカルチャーセンターの企画と変わることはない。法話や坐禅体験会があってこそ永平寺主催の意味がある。

以上はハードの面だが、ソフトの面としては、スタッフが参加者に対して行う徹底した気配りが重要である。参加者が「次にも来たい」と思えるような接客が肝心である。多くの方が、それぞれの思惑を抱いての参加となるため、現場では多くの問題が発生する。それについては、その場で断固たる処置を執り、後に残さず、できる限り希望を叶えるようにしている。それでも、どうしても叶わない場合には、問題点を次回開催に申し送りして、同じ問題が二度と起きないように配慮される。

さらにはアンケートを取って参加者の感想・要望も確認し、スタッフで共有している。運営側にはサービスを行っているという自覚が必要である。

他に、問題点としては、新しい参加者の獲得と合わせて、スタッフの新陳代謝が必要である。どうしても同じスタッフだけで運営していると、慣れた気になって、一方で微細な事象に鈍感になるという問題が発生する。また、同じような発想ばかりが続くことになり、企画のマンネリ化も発生する。それを避けるためにも、ある程度の期間でスタッフの入れ替えが必要である。

今回の記事は、参加者の感想というより、スタッフ側からの備忘録的内容にした。以上に挙げたことは、「禅といま」に限らず、各寺院やさまざまな会で実施されるイベントなどを成功に導くための、最低限の要素であろうと思う。ご参考になれば幸いである。

100人以上の坐禅体験

懇親会の清興・須田千香良先生

… 国内レポート …

「天平の響き　シルクロード・音楽の旅」報告

〔シルクロード・音楽の旅演奏会　開催データ〕
開催日時：2007年８月25日（土）　17：00開演
入場者数：300人
開催場所：吉祥院檜チャリティーコンサートホール
主　　催：ＪＷＳ（ジャズワークショップ）
協　　力：ＳＯＴＯ禅インターナショナル
Ｕ Ｒ Ｌ：http://silkroad.jpn.org

〔出演者〕
曹雪晶（二胡）、邵容（中国琵琶）、田渕勝彦（篳篥）、海老原廣伸（声明）、七聲會（声明）、木崎二朗（ピアノ：司会）、宮崎正秀（ベース）、中屋博之（ドラムス）

曹洞宗出演者（声明）
細川正善　馬場義実　梅田保彦　梅田良光　亀野哲也　石田征良　篁保雄　近藤一崇　黒田博志　桑原龍弘　高橋哲心　木島宏人　赤間秀弘

真鶴駅案内係　内山温子　赤間裕子
受付係　太田賢孝　安藤道隆

2007年８月25日、吉祥院檜チャリティーコンサートホール（檜ホール）において「天平の響き　シルクロード・音楽の旅」演奏会が開催されました。

真鶴半島を見下ろす小高い丘の上に聳え立つこのコンサートホールは、ＳＺＩ会員でもある湯河原・吉祥院住職・尖老師により構想が練られ、日本ユニセフ協会の協力により2006年５月に完成したばかりです。

日本にある数多くのコンサートホールは鉄筋コンクリートの中に造り込まれた建物がほとんどです。
そのような中で、日本古来の木組みと漆喰壁を生かし、吉野や箱根の大檜をたっぷりと使った世界随一ともいえる新しいコンサートホールは、世界中を渡り歩いて活躍されてきた尖老師の、その経験から生み出された工夫が随所にされています。

建設中の檜ホール・尖老師を囲んで

この度の「天平の響き　シルクロード・音楽の旅」演奏会の企画は、一昨年、尖老師により建設途中の檜ホールをご案内いただいたことが発端となりました。

そしてそのご縁にＪＷＳ（ジャズワークショップ湘南）代表の木崎さん、天台声明の海老原師、ゆめ観音で演奏をいただいたシャオロンさん、曹さんなどのご縁がつながり、演奏会実現の運びとなったものです。

演奏会開催日当日は好天に恵まれました。朝から音響関係機材搬入とセッティング、舞台等に楽器などの配置が行われ、昼を挟んで最終リハーサルが進められていきます。

今回は天台声明の海老原師から、天台宗と一緒に曹洞宗の皆様も声明をやってみませんかという提案をいただき、それにお応えする形で曹洞宗第二宗務所第五教区有志一同、ＳＺＩにて研鑽を重ねてまいりました。

リハーサルにおいても、天台声明の途中で曹洞宗が入るタイミング、散華の所作についての合わせを念入りに行い本番に備えました。

同時進行にて演奏会にお越しくださる観客の皆様をお迎えするための受付準備、休憩時間にサービスするだったん蕎麦茶の準備、駅での交通案内など、スタッフがそれぞれの持ち場に散って作業を行っていきます。

開演時間を前に300席あるホールの席もほぼ埋まり、天台宗と曹洞宗による唄･散華により演奏会がスタートしました。

２時間半に及ぶ演奏会の時間はあっという間に過ぎて行き、アンコールを終える頃にはすっかり外は夜の光景へと移り変わっていました。

スタッフ、配役、出演関係者一人ひとりの力をあわせることができたからこそ、一つの演奏会としての成果が得られたといえます。末筆ながら素晴らしいホールをお貸いただきました吉祥院様、素晴らしい演奏をいただいた出演者の皆様、声明のコラボレーションを提案いただいた海老原師、そしてこのご縁をいただきました多くのかたがたに心より感謝申しあげます。そして、ご来場いただきました皆様、本当にありがとうございました。

演奏会主催のＪＷＳ代表・木崎氏、出演者の立場からＳＺＩ篁師、檜ホール代表の尖師それぞれから寄稿いただきました。

■「シルクロードコンサートを終えて」

ＪＷＳ代表　**木崎二朗**

私の主宰するＪＷＳ（ジャズワークショップ湘南）は、音楽の本質は生の音にあり生の演奏を聴いてこそ楽音が意味のあるものとなるということを活動の中心に置いて日々演奏活動に勉めています。

2007年８月25日に開催されたシルクロードコンサートは各方面の音楽家と僧侶による二つと無い取り組みであり大変すばらしい成果を残せたと思いますのでここにご報告申し上げたいと思います。

このたびのコンサートはSOTO禅インターナショナル、神奈川県仏教会のみなさまの後援を賜り神奈川県湯河原町にある世界唯一総檜造りの檜チャリティーコンサートホールを会場として行われました。湯河原吉祥院の尖師が建てられた大変ユニークなコンサートホールで檜の豊かな香りが音楽に絶妙にブレンドしていたことは大変印象的でした。

このシルクロードコンサートの大きな特徴は声明とジャズバンドさらに雅楽と中国楽器との妙なるコラボレーションにあります。このような組み合わせは発想することさえ難しかったのですが、私たちの生活空間に広がる音には国境や宗教の壁もなく渾然と融けあっていることを考えれば実現できたら面白いものになるだろうとの思いがありました。それで日頃関係している各方面の皆様の協力を得て二つと無い響きの音楽会が実現しました。

満員の観客席の前で

当日の詳細をお話しいたしますと、冒頭に唄（ばい）～散華（さんげ）を海老原廣伸師率いる天台声明七聲會の皆さんと曹洞宗の僧侶の皆さん総勢18名による荘厳な幕開けでした。このことにより会場がとても清らかで美しい場となったことは言うまでもありません。旋律などが微妙に異なる他宗派との共同作業はおそらく初めてのことであり現代を表す極めて象徴的な場面であったと振り返って思い出されます。

続いて中国琵琶の若手第一人者である邵容（シャオロン）さん、二胡の曹雪晶（ソウセッショウ）さんと私たちＪＷＳジャズトリオとの共演です。中国演奏家の二人とは寺院などでの演奏会でも度々ご一緒しており息のあった楽しい演奏が出来ました。曲は北京オリンピック公式歌の一つである「茉莉花」（モリファ）、「草原情歌」「アラムハン」「ウシュクダラ」などシルクロードを彷彿とさせる音楽のパレードです。このあと会場の皆様とともに「朧月夜」「里の秋」「故郷」を唱和いたしました。

第二部の冒頭はこのコンサートのメインである声明とのコラボレーションを聴いていただきました。「今様諸天讃」です。これは七聲會と邵容さんを中心に雅楽奏者の田渕克彦さんが再構成を試みた作品で15分ほどの大曲です。もちろん演奏にはジャズトリオ・篳篥・二胡も加わってのフル編成です。言葉では言い尽くせない天上の音楽がそこにあったと思います。コンサートホールでの演奏は３回目になりますが今回の檜ホールでの演奏は特にすばらしい響きがしました。

続いて田渕克彦さんの篳篥による「越天楽今様」「スターダスト」さらに他の奏者も加わってのスタンダード音楽、最後は「だったん人の踊り」で天平の響きの妙なるコンサートを終了しました。アンコールに応えて「蘇州夜曲」「何日君再来」「夜来香」などのおまけもありました。

ご来場の皆様からは感慨深い音楽会であったとのお褒めの言葉を多く頂戴しました。機会があればこのような演奏会をいろいろな場で開催したいものだと思いました。

開催にあたってはSOTO禅インターナショナルの皆様に大変お世話になり心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

■ シルクロード音楽の旅演奏会での散華荘厳

ＳＺＩ事務局員　**篁　保雄**

８月に入り23日目の30℃を超える日となった平成19年８月25日、真夏日を忘れさせる檜の香りにつつまれたコンサートホールの観客席でジャズと中国琵琶の演奏に聴き入った私は、安堵感に満ちていた。それは、演奏会の第一曲目として私たちの出演した散華荘厳が大成功であったからだ。

６月頃だったか、私たち曹洞宗の声明と天台声明を一緒にやってみないかという話を聞いた。違う宗派の声明を同時にやるなんて無理に決まっている。私はそう思った。しかし、天台声明を初めて聴いた時、私の固定観念は取り払われた。曹洞宗の声明とは全く違い、人が発する声というよりいくつかの楽器を奏でた「心地よい和音」といったものであった。

ところが問題はもう一つあった。曹洞宗の声明は習った師（先生）によってわずかだが節（ふし）回しが違う。皆で発声すると、個々のわずかな違いがより際だった違いとなって

声明の練習光景

270度の海を望む檜ホール

しまう。だが教区施食会法要の後、皆で倫勝寺・馬場老師を囲んで何度も何度も練習していき、次第に複雑な声明の節は統一されていった。

コンサートの片づけが終わり、外に目をやると昼間とは違った壮大な相模湾の夜景が一望できた。都会のようにきらびやかではないが、思わず叫びたくなるような心に響く景色で、今でも思い出すことができる。帰路の東海道線では、緊張の糸が切れたせいか座るやいなや深い眠りについていた。下車駅で起こされると、シャツの胸元がたっぷり濡れていた。

末筆ながら、来場のお客さん、スタッフ、そして出演者とのご縁に感謝いたします。ありがとうございました。　合掌

■ 夢の檜ホール

吉祥院　檜ホール　代表　**尖　秀雄**

昨年（2006年）5月21日、夢の檜チャリティコンサートホール（檜ホール）の完成を見ることが出来ました。ホールの建設には構想から10年、私の内では30年の思いが詰まっております。

具体的には、お寺の墓地スペースが無くなり、別地に公園墓地を計画したことが出発点です。これからのお参りは、楽しさが無ければならないと考えていましたので、お参りの方々の休憩所を多目的ホールとして考えました。檜だけでホールを造る発想も、自然と自分の中で進んでいたことです。

1998年、公園墓地内にお参りの方々の休憩所としてまず100坪の檜ホール（小ホール）を造りました。

これまでに墓地の取得と造成工事に何億もかかっているので、最初は総代達も皆猛反対。でも私は「墓地だけ造っても買ってくれませんよ。何か付加価値がないと」と。

音楽会の出来る小ホールが完成してから年3回ユニセフの為のコンサートを開き、ユニセフ箱に頂いた浄財を箱のまま日本ユニセフ協会に寄付してきました。

おかげというか、神仏のお力か、第2期の造成工事に入る運びとなりました。

土地面積2000坪の増。そこが絶景の眺めで、私も海外の禅堂造りでいろいろなところを回りましたが、東は房総半島から西は伊豆半島、箱根の峠まで270度海を望む事が出来る、こんな所を頂いて良いのか、それをきっかけに不思議なことの連続が始まりました。

2002年、コンサートホールの想いが頭に残っていたときに、義父が亡くなりました。その遺産の一部を、妻も音楽が大好きであるので、ホール建設の初動資金として寄付していただきました。

2003年、10月から檜材を集め始めました。しかし、もう日本には大檜がほとんどありません。また、木造建築で500坪の建物が消防法では困難だということで、我々は神奈川県県庁開発部に何度も説明に通いました。地元の湯河原町の協議、これに2年以上もかかってようやく地元の活性化につながるということで許認可が下りました。建築設計の先生も初めて、受ける県土木課も初めてのケースで、構造計算を検討するソフトが無い。そこで、こちらで作った木造構造計算を受け入れていただきました。

大檜は奈良県吉野、小物は全て神奈川県産の檜。県の森林組合には本当にお世話になりました。根太、垂木材だけでも1万本。建前までの大工の刻み作業に2年、上棟に半年を費やしました。丸々4年、とんでもない人工とお金がかかりました。

昨年5月の完成式に、最初に東京神田明神の宮司様、神職の方々の祝詞をいただき、続いて、日本ユニセフ協会専務理事からのお言葉。そして、子どもたちだけによる能舞台、ドイツより招いたピアニストによるピアノ演奏、チェロとピアノの演奏、最後に神奈川フィルハーモニーによるベートーヴェン「運命」。

こんな幸せな事があっても良いのか、これはまさに時代絵巻だと…

今思うことは、「夢は一歩を踏み出せば一歩動く」ということです。神様、仏様の命をいつも自分に感じられれば良いかなと思っています。いろいろな方々が演奏されたり、練習したり。

一番の幸せは小さな子どもたちのピアノの発表会。一人の子どもが先生に向かって、「このピアノは弾きやすいよ。また次もこのピアノでやろう」と言っていました。

弾きやすいはずです。スタインウェイフルコンサートグランドピアノですもの。

ありがとうございました。

【檜コンサートホール】
〒259-0312
神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜1968-1
TEL：0465-63-8923
（檜チャリティーコンサートホール）
URL：http://www.kichijyo.com

…　国内レポート　…

第９回　ゆめ観音アジアフェスティバルin大船

ＳＺＩ事務局員　ゆめ観音実行委員　**内 山 温 子**

平成19年9月8日（土）　11:00－20:00
鎌倉市大船観音寺境内
入 場 料：300円（かながわ民際基金へ寄付）
主　　催：ゆめ観音実行委員会・大船観音寺・SOTO禅インターナショナル
後　　援：鎌倉市・（財）かながわ国際交流財団
協　　力：第五教区、即心会
入場者数：1340人　　**義捐金総額**：409,200円（かながわ民際基金へ全額寄付）

今年で第９回目を迎えたゆめ観音アジアフェスティバルは、運良く前日の台風を逃れ、晴天の下無事に行われました。

スタッフを含めた参加人数は約1500人、ＳＺＩからは10名のスタッフが参加しております。

≪当日スタッフ≫
○大本山總持寺：伊東監院　　監侍　舘寺俊明
　　監録　竹内昭道
○ＳＺＩ:福島伸悦（平和宣言）　細川正善　亀野哲也（全体統括）　太田賢孝　黒田博志　篁保雄（法要統括）　さとうのり（楽屋担当）　赤間秀弘（搬入管理）　赤間裕子（楽屋・看護担当）内山温子（舞台統括）
○東長寺・藤田郁雄
○第五教区：松山典生（全体統括･大導師）　山本雅彦（舞台担当）　梅田良光　石田征良　秋山正明（搬入管理・托鉢）　北尾康樹（搬入管理・托鉢）　近藤一崇　桑原龍弘　高橋哲心　木島宏人
○即心会：雨宮福音　鈴木田浩之　上形卓道　赤星良光　中島輝昌（托鉢）　松樹俊弘（托鉢）
○宗務庁：瀬野美佐　岸本茂枝
○黒米さゆり（アナウンス）　　＜順不同・敬称略＞

■ 準備・運営をふりかえって　～舞台裏から～

ゆめ観音実行委員会は、昨年同様、松山老師を中心に大船観音寺とＳＺＩの協力体制をとり、また監事にはＳＺＩ福島会長、かながわ国際交流財団の細田課長に入って頂きました。舞台へは和太鼓同好会の皆様、二胡奏者の曹雪晶氏、横浜中華学校校友会国術団をこのたび初めてお迎えし、出店ブースでは神奈川県仏教会よりダライラマ法王（今年11月来日）とチベットについてのご案内、（株）スカイテック社からは、太陽光発電の寺院への導入事例紹介を頂きました。

鎌倉市内ポスター貼り

残暑厳しい折、快適に思い思いの格好で観覧できるよう、観客席には今回から芝生が植えられ、当日はドライミストを設置。昨年製作された舞台も、いよいよ一般貸出しを始めました［註１］。

今年は、7月から8月にかけてのポスターとチラシ作り、鎌倉市役所でのプレスリリース、市内の広報掲示板ポスター貼りを大船観音寺の皆さんと一緒に行っています。実務記録そのものも、手元におくだけでなく、スタッフ日誌としてブログ上に公開しながら準備をすすめました。ホームページと連動させることで、当日までにスタッフ同士のモチベーションも上がりますし、また、毎年来られている方がインターネット上で感想を残して下さるなど、お客さんは実際に来られる方だけをさすのではないということを実感しております。

境内にてテント設置準備

しかし、このような一連の作業は実際のところ、われわれが宗教団体に属している、宗教施設で行事をするといった背景を持っていることによって、公共に向けて情報を発信する際、いつもある種のストレスを感じることは確かです。そのような中で鎌倉市役所さん、かながわ国際交流財団さんからご後援頂いていることは本当にありがたいことですし、これまでの継続で得られたものも

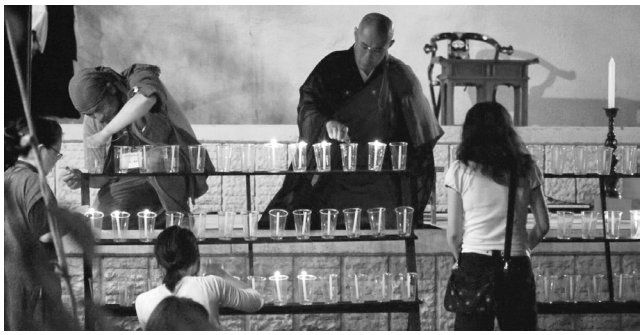
［註１］　お申込・お問合せ先　〒247-0042　鎌倉市岡本1-5-4　　大船観音寺　Tel. 0467-43-1561　Fax. 0467-43-1562

非常に大きく、来年第10回という節目へのステップとしての「第9回」だったように思います。

早大公認サークル　わせだ風街宣伝社

今年初登場！
フィリピン料理　kawanggawa group

■ 萬灯供養



あまりに強い風のため松明などの大掛かりな火は使用できませんでしたが、炎が消えかかっても、参加した方が次々と点灯を手伝ってくださったこと。法要が終わって後片付けしている際に、小さな子どもさんがお母さんと一緒に、今まで灯されていた蝋燭を手にとりながら「おうちでまた火をつけようね」とお話する様子、「日本各地で、いろいろな場所の萬灯供養にお参りしているんですよ」と話しかけてくださったおじいさんが、蝋燭をたくさん集めて大事にかかえて帰る姿は非常に印象的でした。

＊＊＊

今年のゆめ観音のポスターには、“音と光の法要へようこそ”というサブタイトルをつけていました。舞踊音楽などの身体表現、供物をともなう「祈りの場」は、一見すると非日常的な出来事のように思いますが、「祈る」という行為は祈る人にとっての家族やそれらをとりまく環境、先祖や子孫の平和を願うとき、決して特別なことではないものだと思います。それから、お寺という空間もまた、公と私いずれかへ属するのでない、やはり公と私とを結ぶ場［註２］であるということも、運営に関わってみて改めて感じた点でした。異なる宗教・異なる文化を持つ人との交流によって、居合わせる人々が其々の歩む道とお互いの心の拠り所を照らし合える、「日常」について思い巡らす一日であったと思います。

――「平和は、政治的、経済的、軍事上の契約だけによって保障されるものではありません。最終的には人々の一致した誠実なゆるぎない取り決めによって築かれるものです。年齢、性別、社会的地位、宗教的帰属、または文化的背景の違いを超えて、私達一人ひとりが、平和な世界を創ることを求められています。平和は、私たちの行動、態度、日常の行為を通してのみ達成できます。平和の文化はすべての人が分かち合う、普遍的な文化であり、私たちに共通する人間性に不可欠なものであることを認識し、私たちはそれを行動に移していくことを誓います。」

（ＳＺＩ福島伸悦会長・平和宣言より抜粋）

～当日の万灯供養法要配役～

大導師大船観音寺監寺・総都管　松山典生老師
焼却師　ＳＺＩ副会長　細川正善老師
両班　松樹俊弘（東一）太田賢孝（東二）
篁保雄（東三・維那）　秋山正明（東四）
上形卓道（西一）市川憲章（西二）
中島輝昌（西三）藤田郁雄（西四）
都管・法要解説　亀野哲也　堂行兼鐘司　梅田良光
副堂・太鼓　桑原龍弘　　当番手磬甲　石田征良
当番手磬乙　黒田博志
侍者　舘寺俊明　侍香　竹内昭道
知殿兼写録　山本雅彦
殿行　近藤一崇　雨宮福音　赤星良光
高橋哲心　木島宏人

皆様の願いごとを、この日のために集まった僧侶の方々が、しっかりと届けてくださると信じております。

［註２］　本号p.6-9 宗教間対話研究所・第３回例会報告　参照

◎出演・・・わせだ風街宣伝社（ちんどん）、平和宣言（ＳＺＩ）、和太鼓同好会、WADA（ベトナム・月琴）、山中ひとみ（カンボジア古典舞踊）、女性連盟湘南西湘支部舞踊同好会・神奈川朝鮮初級学校（朝鮮舞踊）、横浜中華学校校友会国術団（中国獅子舞）、和太鼓JU-ZO、台湾佛光山寺、Madhu-Priya(インド古典舞踊)、曹雪晶（中国二胡）、セーンジャー（モンゴル・馬頭琴）、Ethno-Exotica Vaudeville（中東舞踊）、萬灯供養　◎出店・・・インド政府観光協会(観光ガイド)、㈶かながわ国際交流財団、東京アショカ（インド料理）、kawanggwa Group（フィリピン料理）、フルーカ（中東料理）、イスガヘ・ポルホリ（イラン料理）、印度支那倶楽部（南アジア民芸品）、We21ショップジャパン、love vietnam（ベトナム雑貨・枯葉剤障害児支援）、地球市民ACTかながわ、アースママショップ、㈱スカイテック、神奈川県仏教会　◎音響・・・スタジオアジャ　◎プレスリリース用萬灯供養資料・・・つらつら日暮らしwiki　◎撮影・・・小田晃司、亀野哲也　◎映像・・・山本雅彦

ＳＺＩ創立15周年記念行事にむけて

ＳＺＩ事務局長　**亀 野 哲 也**

はじめに

ＳＯＴＯ禅インターナショナル（ＳＺＩ）は、1993年2月に国際布教経験者有志の呼びかけによって曹洞宗の国際布教、及び曹洞禅の国際交流を推進する団体として発足して以来、来年2008年で創立15周年を迎えます。

ＳＺＩの設立は、1991年に宗務庁教化部に国際課が設置され、国際布教の体制が宗門として整えられつつあるとはいえ、まだまだ国際布教師は経済的な不安を抱えながら布教活動を展開せざるを得ないという状況の中、（１）日本からの経済的、精神的支援を行うということ（２）国際布教を宗門全体の問題として捉え、多くの方々に理解いただくこと（３）国内外の情報を収集し、それを発信し、ネットワークをつくるという目的で設立されました。

ＳＺＩ設立の年に発行された会報創刊号の巻頭言として、初代会長・松永然道師は次のように述べています。

「過る二月に、両大本山及び宗務庁、元海外開教師、また海外開教について今日までご支援や関心を寄せられた多くの先輩諸老師の参加を頂き、ＳＯＴＯ禅インターナショナルが発足の運びとなりました。＜中略＞今、世界中が大きな変革の中にあります。この変革期に当たって、我々宗門人も等しく己を見つめ直し、国内、海外をとわず布教教化とは何かを再考すべきであります。この時期にＳＯＴＯ禅インターナショナルが出発できますことは、意義深いものと思います。＜中略＞開教諸師は多様性の世界で教化宗団の一人として、違う世界観を肌で受け止め、共生してきた経験を持っています。国内にあっても、現在のお互いの情報を交換し連携を密にすることが、引き続き懸命の精進をしている現開教諸師、更には国内の諸老師方の浄業に細やかながらも役に立つことになるのではないかと思います。」

世界の人々の生活は相互に依存し、影響を及ぼし合う地球時代を迎えています。国際布教はまだまだ当該関係者のみの関心ごとで終始してしまっている感もありますが、例えば山積する国内の諸問題も、グローバル化の進展する社会においては海外の事例を導入することで解決できることも多いことでしょう。国際布教を国内においても自分たちのこととして捉え、実践の場で生かしていくことにより、国内の布教の場でも相乗効果があることと存じます。

混迷する世界情勢の中で、平和と繁栄は人と人との調和と相互発展の中でしか実現できない状況となり、「人権、平和、環境」等、人類共通の課題を世界の人々と担いあって取り組んでいくことは、我々曹洞宗の重要な使命であるといえます。

従って、海外各地域と連携して宗祖の教えを実践し、世界の人々と友好的に親善の輪を広げ、これからの未来を担っていく世代が安心して暮らすことのできる社会を実現するためには、いかなる小さな努力をも惜しむべきではないとＳＺＩは考え、この15年間を歩んでまいりました。

創立５周年・10周年記念行事を振り返り

ＳＺＩ15年の歩みの中で、これまでに節目に当たる創立5周年（1998年）、10周年（2003年）の年に開催された記念行事を振り返り、概略をご紹介します。

■ＳＺＩ創立５周年記念行事（1997-8年）

●記念シンポジウム　1997年10月12－13日　於　熱海
テーマ：「海外開教と開教師支援について」
パネリスト：
細川正善師（元北米開教総監部参事・桑港寺主任開教師）
黒田武志師（横浜善光寺住職）
山本健善師（宗務庁人事部秘書課長）
〔内容〕各開教区で山積している問題に対し、ＳＺＩとしての活動・事業を見直し、新たな方向性を探る意図により開催され、現在運用されている国際布教支援積立金運用の基礎を作り上げるきっかけとなった有意義なシンポジウムでありました。

●ＳＺＩ設立５周年記念講演　1998年2月16日
於　檀信徒会館
『禅修行を通して得られたもの‥‥両鏡相照』
ブライアン・バークガフニ氏（長崎総合科学大学教授）

●海外布教シンポジウム
テーマ：仏教東漸「異文化圏で育つ仏法」
1998年6月15日　於　愛知専門尼僧堂
基調講演　「北米巡回布教をとおして」
愛知専門尼僧堂堂長　青山俊董師
パネリスト：
ベナージュ大円師
（米国 ペンシルバニア州 マウント・エクィティ禅堂堂長）
法岳光徳師
（京都府・臨済宗宝泉寺住職・花園大学禅文化研究所研究員）
青山俊董師（愛知専門尼僧堂堂長）
コーディネーター：
峯岸正典師
（群馬県　長楽寺住職　曹洞宗海外開教 審議会委員）
〔内容〕愛知専門尼僧堂・アメリカにおける女性の禅指導者を支援する会と共催。異文化圏へ伝え、そして学ぶ。相互依存し影響しあう地球時代において、海外布教の実践が日本に紹介され、相互の布教活動が刺激され活発になるきっかけとなり、相互協力・協働への環境整備へのＳＺＩの役割を明確にすることができました。

●北米ロサンゼルス禅宗寺創立75周年記念事業支援
1997年4月18－20日　禅宗寺にて
・記念行事へスタッフ派遣などの人的支援
・身体障害者参詣道建築寄付（267万円）

■ＳＺＩ創立10周年記念行事（2003年）
●ＳＺＩ設立10周年記念シンポジウム
テーマ：「ハワイ開教100年 現状と未来」
2003年2月20日　於　曹洞宗檀信徒会館
パネリスト
今井真行師（日蓮宗宗務院伝道部国際課長）
設楽実師（真如苑総合企画部）
岡本信之師（浄土真宗本願寺派大恩寺住職）
山本宜亮師（立正佼成会松戸教会長）
倉岡弘叔師（高野山真言宗教学部次長）
吉田宏得師（曹洞宗国際布教総監部書記）
〔内容〕この年開教100周年を迎えるハワイに地域を絞り、日本仏教が遭遇している数々の問題点を直視し、一面において今後の日本における仏教のありようについて、アンテナショップ的な示唆的かつ現実的な提言をまとめました。

●ハワイ開教100周年記念行事支援
2003年10月24－26日　ハワイ各地にて
ＳＺＩ特別会計予算を組み、また、ハワイ開教100周年記念募金を募り下記のとおり支援をさせていただきました。
記念行事へスタッフ派遣などの資金的・人的支援
国際布教師へ改良衣の贈呈（12着）
ハワイ開教100周年記念募金（278万円）
クワキニ病院へ寄付（10000ドル）

そしてＳＺＩ創立15周年の節目へ

現在ＳＺＩでは、2005年に三代目会長として就任した福島伸悦会長を中心に、「人・情報・縁　――　運動から行動へ　――」というスローガンの下、これまで培われてきた経験を活かし、ＳＺＩブランドの確立を目指して事業を展開しています。

ＳＺＩブランドの確立への具体的な行動としては、埋もれている人材を発掘し、国際布教に情熱を持つ人材を育成し、宗門に限らず世界の宗教の動向を把握できるように人と情報を駆使していくことが大切であると考えています。

そのために、（1）機動的・効率的な組織作り（2）外部専門家の登用（3）目標設定と評価（4）情報ネットワークの充実（5）スタッフの意欲向上と能力開発という5つの行動目標を提示し、曹洞宗教化部国際課をはじめ関係諸団体と情報交換をしながら、ＳＺＩならではの役割を果たしてきました。

来年のＳＺＩ創立15周年の節目の年に、これまでの15年の活動の集大成としてＳＺＩ創立15周年記念行事を行うべく準備を進めています。

その核と位置づけられるものが、来年6月に開催予定の記念シンポジウムです。

ＳＺＩ創立15周年記念シンポジウムの概要

■2008年度総会・創立15周年記念講演会
2008年2月20日（水）　檀信徒会館　桜の間にて
講師　野田大燈師　　演題　「禅的発想のすすめ」

■ＳＺＩ創立15周年記念行事・記念シンポジウム
2008年6月19日（木）　檀信徒会館　桜の間にて
テーマ：「世界の曹洞禅」
～禅の果たす社会的役割～
講師予定者　　基調講演　講師　奈良康明師
記念シンポジウム
パネリスト
北米・南米・ヨーロッパより各1名
コーディネーター　ダンカン・ウィリアムズ先生
（カリフォルニア大学バークレー校教授）

今、世界は、人権・平和・環境・経済・情報という5つの柱の中で動いているものと考えています。

それぞれの柱についてキーパーソンにお集まりいただき、実践行動をどのように展開していくかについて提言をいただく予定です。

また、シンポジウムのパネリストには、世界各地から、人権・平和・環境・経済・情報のそれぞれの分野で実践活動を展開されている方をお招きする予定です。例えば禅＝癒しの機能として、禅カウンセラーの実践者であったり、環境問題の実践者であったり、平和運動の実践者であったり、ホスピスなどの実践者であったりというように5つの柱からの提言をいただくことを計画しております。

今回のシンポジウムの特色として、実践事例をただ単にご紹介していただくだけに留めず、例えば国内の寺院でその活動を展開するにはどのような手続きが必要か、どのような問題があるか、どのような波及効果があるのかといった具体的かつ専門的な技術情報を提示できるものとしたいと考えています。その一環として、講演会資料・テキストを用意させていただく予定です。日本における各テーマのノウハウ集として、実践活用への一助となればと願っております。

さいごに

なお、来年2月に開催される2008年度総会講演会（会報最終ページ参照）の講師として報四恩精舎・野田大燈師を予定しており、また、6月に開催予定の両大本山を会場としたワークショップにおいては、それぞれ記念シンポジウムパネリストの方より講師をお願いすることを考えております。従いまして、総会講演会・両大本山ワークショップ・創立15周年記念シンポジウムの3つの行事が相互に関連性のある事業として位置づけられ、全体として15周年記念行事を形成していくこととなります。

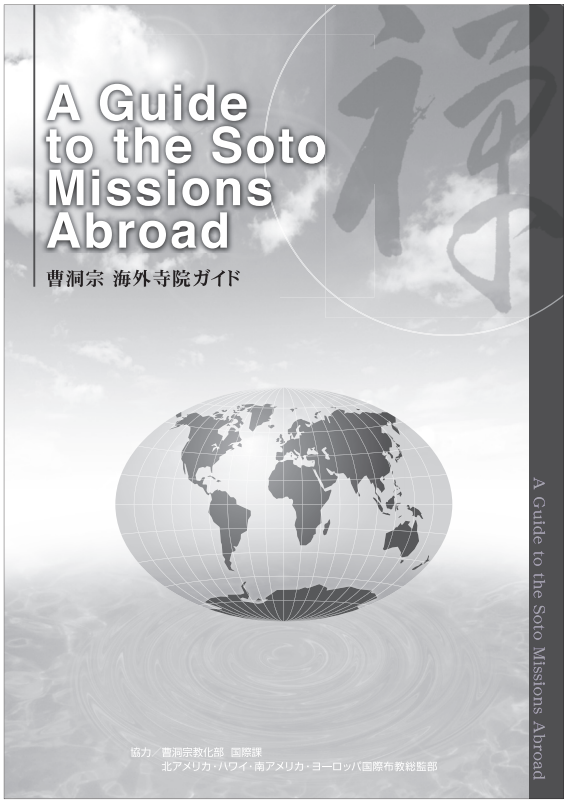
皆様方の多数のご参加をお待ちしております。どうぞご期待下さい。

（補注）文中の組織の呼称、肩書き、役職の表記は当時のものです。

海外寺院ガイドブック発刊について

このたび、懸案であった海外寺院ガイドブックがようやく発刊されることになりました。ヨーロッパのパリ郊外に、はじめて海外の宗立専門僧堂が開単されたという記念すべき年に発刊できますのも、世界の各地に禅を修行する多くの宗務庁国際課をはじめ各総監部、そして回答を下さった日系寺院、禅センターの皆様のご協力の賜であると、心から御礼申し上げます。

まだまだ不完全な形での発刊ということで多方面よりご批判を仰ぐことになるかと存じます。情報収集に大変苦慮して参りましたが、とりあえずこのガイドブックを世に出し、皆様方から不備な点、あるいはお気づきの点をご指摘していただき、改訂版を出すようにしたいと考えております。何卒皆様方のご協力をお願い申し上げます。



特別寄稿

「平和を祈る」

曹洞宗総合研究センター研究員　丸山劫外（まるやま こうがい）

シュエダゴンパゴダ

他の識者の非難を受けるような下劣な行いを、決してしてはならない。一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穏であれ、安楽であれ。（中村元訳『ブッダのことば』「慈しみ」より）

これは今年、ミャンマー（ビルマ）で行われたデモの折、僧侶たちがお唱えになっていた「慈経」の一節である。あの僧侶たちが願ったのは、軍事政権の転覆や、政権の返還が最たる目的ではなかったろう。ただ、ひたすらに、貧窮にあえぐ庶民生活を救済することであり、また僧侶に暴行を加えた軍政に対して謝罪を求めての平和的な抗議行動であった。誰が手に武器を持っていたであろうか。しかし、はじめ民衆の生活苦を救うためのデモも「軍事政権打倒」を掲げるようになった。だが、僧侶たちの抗議運動はあくまでも祈りと読経によるものであり、一切の武器を持ったものではなかった。そしてミャンマー全土の僧侶たちが行ったのは覆鉢（鉢伏せ行）であった。それは仏陀を誹謗したり、仏法を誹謗したり、僧団（サンガ）を誹謗したり、僧侶たちの住処を荒廃させたり等に該当した行為を在家の人がした場合に、僧侶に許されている宗教的抗議行動である。一切の布施を受け取りませんよ、という意志表示であり、在家の人にとっては徳積みができない一大事ということになる。これは日本の人々には考えられないことであろうが、徳積みをさせて頂けないということは、現世及び来世の自分自身の安楽のために由々しい罰にあたる。

ミャンマーの多くの国民は仏教徒であり、軍人たちの多くも仏教徒であるから、覆鉢をされることは、本来ならば、お許し頂きたいはずのことなのである。しかし、軍事政権は発砲し、多くの僧侶を拘禁した。その上でお袈裟をはぎ取り還俗させたつもりになって、拷問にかけたり、虐殺したのである。しかし、心の袈裟を剥がすことは誰にもできない。

世界を見渡せば、ミャンマーだけではなく、あちこちで戦いの炎が燃えさかっている。イラク、アフガニスタン、イスラエル、パキスタン、イラク・トルコ国境、チェチェン等々。大宇宙の中の小さな天体、地球の中で繰り広げられている戦い。自虐行為をしていることに気が付かないで、自分だけ権力を持ち、冨を手に入れられれば、それでよしとすることは、人間として残念なことだ。他の人を殺すために自分の命を授かったのではないのだ。「人身得ること難し」であり、せっかく人間として生命を受けたのに、それは残念なことなのだよ、と宗教者こそ伝えなくてはならないことであろう。

政治的に他の国に干渉するということはできないが、僧侶としては生きとし生けるものの命を奪うことは過ちであること、これを示さなくてはならないであろう。同じく「慈経」に次の釈尊の言葉がある。

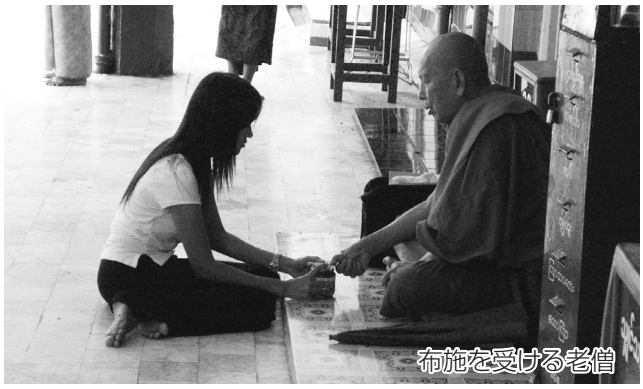
あたかも、母が独り子を命を賭けても護るように、その一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の（慈しみの）こころを起こすべし。（中村元訳）

拘禁され拷問を受け、僧籍を剥奪された一人のミャンマー僧は、故郷に帰る前に、「拷問を受けているとき、拷問する兵士の心に平安が訪れるようにひたすらに祈っていた」と友に語ったという。

また全世界に対して無量の慈しみの意（こころ）を起こすべし。上に、下に、また横に、障碍なく怨みなく敵意なき（慈しみを行うべし）。（中村元訳）

たまたま現在は、戦火の火花が散っていない日本で、安穏に生活している僧侶として、できることはなにか、一人ひとりに問われている問題ではないだろうか。

（写真・古山健一師提供）


布施を受ける老僧

特別寄稿

東南アジアの中のタイ仏教

日本大学文芸学部教授　此経啓助（これつねけいすけ）

● はじめに

今年の夏、東南アジアのタイ、ラオス、マレーシア、シンガポールの４カ国を１ヵ月間ゆっくりと巡ってきました。目的は上座仏教のタイ仏教寺院もしくはタイ仏教徒の動向を知ることで、きっかけは「アジアの街角　6：00　ルアンプラバン①＜ラオス＞　観光喜捨」と題された小さな新聞記事でした。

「早朝。約80の寺から、オレンジ色の袈裟を着た数百人の僧侶が一斉に托鉢に出る。10代の小僧も多い。人々は道ばたにひざまずき、モチ米や菓子を差し出す。

中心部で見る限り、地元の人より観光客が多い。最近は隣国タイからバスを仕立ててやってくる団体客が目立つ。同じ仏教国。これほど多くの僧に、一度に喜捨できるところはタイでは少ないからだという。喜捨の品を売るのはメコン川対岸の村からやってくる主婦ら。午前４時前に起きて米を炊いて準備するという。

メコン川と支流の合流点に位置する山間の古都は95年に世界遺産に登録され、爆発的に観光客が増えた。97年の６万人から05年は26万人。今年は上半期で20万人を超えた。街も変容を続ける。（文・柴田直治）」（「朝日新聞」06年10月16日）

この記事を読んだ最初の印象は、本当だろうか。ちょっとオーバーではないか。そんな思いでした。「街を托鉢する僧侶と喜捨する人々」というのがタイやミャンマーなどの上座仏教国のイメージとして、私の頭に完全に刷り込まれていたからです。2000年にタイとカンボジアの農村の寺院を訪ねたときも、早朝、僧侶を待ち受ける村人の姿に接し、大きな感動を得ました。

もしかしたら、グローバリゼーションの大波の中で、ゴータマ・ブッダの伝統仏教を伝える上座仏教の国々も、変容を余儀なくされているのかも知れない。

「百聞は一見に如かず」の諺に従って、勤務先の大学から研究費が出たのを幸いに、上記の４カ国を自分の目でしっかり見て回ってきました。この拙文はその時の印象を大急ぎでスケッチしたものです。

● 斎場のあるバンコクの寺院

最初に訪れたタイの首都バンコクは、文字通りの大都会です。寺院の数は膨大ですので、いくつかの寺院を選んで、様子をうかがうことにしました。

早朝、僧侶は托鉢に出かけるのだろうか。ホテルのあるシーロム通り周辺は、ビジネス街と歓楽街が雑居するにぎやかな街です。地下鉄のサムヤーン駅を出たところ、ラマ４世通りに面して、ワット・フアランポーンという大寺院があります。８月下旬の朝６時、出勤する人々の姿もまばらな都会、大きな寺院の境内にはお参りする信者の姿もなく、閑散としていました。僧侶は托鉢に出かけたのでしょうか。７時過ぎ、僧院の入口でぶらぶらしていると、僧侶が一人、信者の車で送られてきました。僧侶は鉄鉢を両腕で抱えて、信者と一緒に建物の中に消えていきました。

この大寺院で托鉢が行われているかどうか確認できませんでしたが、そのこと以上に驚かされたのは、境内の片側に建ち並んでいた10棟近くのホールがすべて斎場だったことです。早朝でしたので、ホールは空っぽでしたが、入口の張り紙で気がつきました。夜、再び寺院をたずねると、すべてのホールに明かりがついて、葬儀が行われていました。中央に祭壇が設けられ、その前に参列者が立ったり、座ったりしています。彼らは日本仏教と同じ大乗仏教徒の華人（中国系の人々）で、そこでは告別式を行っていたようです。というのは、本堂に面した別の建物で、大乗仏教の僧侶たちが葬儀式を厳粛に執行していたからです。中央に仏壇を設け、楽隊が僧侶の読経ににぎやかな伴奏を奏でていました。

● ルアンパバーンの「観光喜捨」

タイのチェンマイをあとにして、ラオスのルアンパバーン（拙稿ではこう表記します）に飛んだのは９月の頭でした。機上から見た赤い川メコンと深い山々がとても野性的で、こんなところにゴータマ・ブッダの仏教が生きていることに感動しました。

首都ビエンチャンから北西約400キロにある古都ルアンパバーンは、14世紀半ばにラオス最初の統一国家ラン・サーン王国の王都になって以来、近年の革命で王政が廃止されるまで栄えてきました。市内には約80の寺院が建ち並ぶ、どことなくネパールのカトマンズに似た風情のある小都市で、冒頭の新聞記事に見るように、1995年に世界遺産に登録されました。早朝、本当にタイ人の「観光喜捨」があるのか。私はそれを確認するために、ワット・シェントーンなどの有名な大寺院が近くに多く建つホテルに逗留し、毎朝５時半に

ホテルの前で僧侶を待ち構えました。

僧侶の托鉢は、だいたい空が明るみ始める早朝5時半過ぎ、各寺院を出発し、それぞれのコースを取って街中を回り、30～40分で托鉢を終えるようです。私のホテル前通りのように、コースが重なって、100人を超える僧侶が長い行列をつくっていく通りもあれば、まるで姿を見かけない通りもあります。住人はその通り道を知っていますが、欧米人などの観光客は不案内です。ですから、観光客はカメラを手に、街のあちこちに出没する僧侶を追ってウロウロする。私もそんな一人になって、2日ばかりを過ごしました。3日目の朝、その日は雨模様の悪天候でしたが、タイからきた観光客10人が私のホテルの前に並び、ラオス人のガイドから喜捨の作法を習っていました。私は僧侶の通らない道の反対側に位置取りし、そこは喜捨をしない観光客の見学席のせいか、天秤棒の女性たちもあまり寄ってきませんので、じっくり「観光喜捨」を観察することができました。タイ人観光客は作法を習い終えると、地面に敷かれたゴザに正座し、手にお盆を持って緊張しています。やがて、僧侶の行列がやってくると、彼らは喜捨の品物をそれらが無くなるまで僧侶一人一人に渡し続けていました。

新聞が「観光喜捨」と名づけたのには、理由があります。翌日、その翌日と増え続けてきたタイ人観光客の喜捨を見ていて気がついたことですが、みな記念撮影に興じて、一日観光を終えるとさっさとタイに帰っていきました。この雨期の季節、低価格のパック旅行が出回るため、「観光喜捨」が増えるそうです。ラオス人ガイドの話です。

● ペナン島の寝釈迦仏寺院

マレーシアの西海岸北部に位置するペナン島は、温暖な観光地・リゾート地として日本人にも最近人気があります。約60万の人口のうち、70%が華人だそうですが、マレー人もインド人も目立ちます。18世紀の後半、イギリス人がマレーシアに最初に入植した地としても知られ、島の中心地ジョージタウンはコロニアル（植民地風）な街並みが色濃く残っています。

ジョージタウンのはずれに「寝釈迦仏寺院」と呼ばれるタイの寺院があります。正式名はワット・チャヤマンカララームで、全長33mの巨大な寝釈迦仏が観光客を集めています。この寺院を訪れたのは二度目で、昨年の春、末の息子と一緒に定番の観光コースで立ち寄りました。極彩色の本堂に涅槃像が横たわり、境内にパコダ（仏塔）や菩提樹があるので、ガイドの説明通り、いかにもタイの寺院だな、と最初思いました。短い時間でしたが、よく観察すると、本堂入口に2匹の巨大な竜が身構え、その横の建物には観音像が安置され、さらに、その手前の堂には「四面仏」と称された密教風な仏像があり、参拝者が次々と中国仏教風に線香を捧げていく。そういえば、寝釈迦仏の体内と背後の壁面いっぱいに骨壷が納められていました。上座仏教寺院にこんなものがあっていいのだろうか。そんなおかしな感想を抱いて寺院をあとにしたのですが、その様式がとても気になって再度たずねることにしました。

改めて「寝釈迦仏寺院」を観察しますと、寺院には島外からの観光客がよく訪れますが、観光客より多いのが島在住の華人で、彼らの参拝目的は「四面仏」です。日本の寺院で見かけたことのないこの仏は、4つの面（顔）を持ち、1面は「平安」、2面は「財運」、3面は「人縁」、4面は「聡明」をもたらす、と漢字で説明されています。現世利益の仏のようで、参拝する華人のすべてが線香と花を手に4面を回ります。それを終えると、たいていの華人が「Welcome here for Holy Water Blessing（軟迫酒聖水・消災納福）」の立て札に導かれて、タイ人僧侶の待つ建物に出向きます。華人

寝釈迦仏

寝釈迦仏寺院　本堂入口

四面仏

は僧侶から聖水を受け終えると、布施を置いて退出します。

この寺院の土地は1845年にヴィクトリア女王がタイ仏教教会に寄附したもので、本堂は1958年、釈迦生誕2500年を祝って建てられ、寝釈迦仏は世界で3番目に大きいといわれています。もともとはタイ様式建築だったのですが、次第に入口に竜が身をくねらせるような中国様式建築が入り混じるようになったようです。そのいきさつは分かりませんが、島の人口の70%を占める華人の影響を無視することはできないでしょう。本堂の裏手の草生した墓地に、土葬用の中国様式の墓石が並んでいます。また、島内中央部の丘陵に、広大な華人の墓地があり、沖縄の亀甲墓に似た大きな墓が一帯に点在していました。しかし、人口の増加と共に、火葬用の納骨堂を利用せざるを得ない華人も増えてきたのでしょう。本堂壁面の納骨堂には、約1000体の遺骨が納められていました。

● イスラム地方にあるタイ寺院

マレーシアの東海岸北部にあるクランタン州は、マレーの伝統文化が息づく地方で、大多数の住人がイスラム教徒です。その州都コタ・バルを訪れたのは9月中旬過ぎで、イスラム教のラマダン（断食月）が始まるころでした。昼はすべてのレストランが閉まってしまう土地柄でした。

そんなイスラム地方をたずねた理由は、コタ・バルがタイと国境を接しているため、昔からタイ系住人が住み、彼らによって多数の仏教寺院（約20ヵ寺）が守られている、と聞いたからです。その仏教寺院の近年の変容を調査した論文に、「イスラーム国家マレーシアに見る仏教徒シャム人のアイデンティティ」（モハメド・ユソフ・イスマイル、メコン刊『変容する東南アジア社会』所収）があります。私はコタ・バルの北にあるトゥンバット村を中心にして、近在の村々のタイ寺院を10カ寺近くたずねました。その一つのワット・ボティヴィハンは、全長41.2mというマレーシア最大の涅槃像で有名です。私は巨大な涅槃像に驚かされましたが、それ以上にビックリさせられたのは隣接する伽藍に鎮座した大仏でした。それは大乗仏教の久遠の釈迦を思わせる仏像で、その他さまざまな神仏像がところせましと並び、描かれ、堂内は大乗仏教と密教のパンテオン（神殿）そのものでした。タイ寺院になにが起こったのでしょうか。

ワット・プラチュムタート・カナラム入口

地蔵殿

「華人がいくつかの寺院の境内に自分たちのための宗教的空間を確保しはじめたが、シャム人（筆者注＝タイ国のタイ人でなく、クランタン州のタイ人）にとって、これは、非シャム社会から財政的・精神的支援を引き出すための、いわば避けることのできない取引のようなものである」（岩田晶子訳）

上記論文はこういいます。私の回った寺院の半数近くに中国様式建築が入り混じっていました。巨大な観音像あり、阿弥陀像あり、中国様式の建築ラッシュでもあります。有名寺院には、大勢の華人が遠いペナン島や南のジョホール・バルからバスでやってきていました。彼らは寺院に到着するや否や、お目当ての大乗仏教の仏像に向うか、病気治しや運命占いで知られる高僧の前に列をつくります。

ワット・プラチュムタート・カナラムをたずねたとき、古ぼけたタイ様式の伽藍を通り過ぎて、境内のはずれで、真新しい「地蔵殿」に出合いました。美しい殿堂の先はハス池のある庭園でしたが、それを取り囲むようにして2階建ての回廊が遠く見えます。なんだろう。よく見ると、それは納骨堂で、ほんの一部ですが、骨壷が納められています。お地蔵さんと納骨堂の組み合わせは、まさしく大乗仏教です。こうした光景に出遭って、私の心は、上座仏教もここまできたのか、という思いよりも、今日、仏教国において仏教の「財政的・精神的支援」が国家や民族を越えて、全仏教徒が担わなければならない課題になっているのではないか、という思いでいっぱいになりました。

納骨堂と蓮池

海外インフォメーション

佛心寺創立50年と日本移民100周年

南アメリカ国際布教総監　采川道昭（さいかわどうしょう）

海外布教に興味のある方とっては各国際布教区の開教年について興味があることと思います。そこで近年の各布教区で修行された記念行持を見ますと、北米開教80周年とハワイ開教100周年は2003年に、南米開教100周年記念行事は2004年にペルーで行われ、ヨーロッパ開教40周年は本年に厳修されたことが記憶に新しいことと思います。

各開教区を総合し、さらに極めて大まかに眺めると、日系移民と共にあるいは日系移民を追いかけるような形で曹洞宗が海外に出てから、およそ100年が経過し、坐禅を中心として非日系の人々に曹洞宗の教えが伝わってから、50年前後が経過したと言えます。

ここ南米に於いては、前述のごとく2004年にペルーに於いて宗門をあげて南米開教100周年行持を行ったわけですが、日系移民最大国のブラジルではペルーとは状況が異なり「ブラジル日系移民100周年」は来年2008年に控えているものの、宗侶が常駐しての実際の布教が始まったのは移民より約50年後のことです。

その理由は、初期の移民の中に曹洞宗の僧侶が居なかったり、ブラジルでの布教に対して宗門の目が届いていなかったり、カトリック以外の宗教活動の制限など諸種の事情によるものです。

このような事情ですので、ブラジルでの布教は、日系の方々への主として先祖供養の儀式を通しての布教と、現地の非日系の人々に対する坐禅を中心としての布教が同時期に始まったというのがその特徴です。

ともあれ、ブラジルでの曹洞宗の開教は第二次世界大戦後、しかも現在ブラジルで活動している旧仏教中最も遅く布教活動がはじまったわけですが、高階管長猊下が佐々木泰翁宗務総長を随行長に佐瀬淳光老師を侍者としてご巡錫された昭和30年（1955）を機に、翌年には新宮初代総監の赴任へとつながり、着実にその歩みを進めております。

ご縁を頂戴して、2005年に赴任して間もなく施設面の不備を痛感し、2009年を落慶と50周年慶讃法要の予定として、坐禅堂その他の諸堂を完備した大鑑閣（仮称）の建設を発願いたしました。最初は2007年には落慶と慶讃法要を行いたいと念じておりましたが、建物の建立となると第一に資金面で容易でないことや、将来を視野に入れた、時代に即応した建物となると綿密な計画が必要なことなどから、できるだけ時間をかけることにいたしました。さらに創立50周年というのがどの年を起点に計算するかという問題もあります。

と言いますのは、両大本山南米別院であると同時に南米国際布教総監部である祥嶽山佛心寺の称号は、高階管長猊下がご巡錫された昭和30年（1955）に認可されておりますが、初代総監によれば1957年をもって創立とされております。ところが定款においては1960年9月28日創立となっております。実際に布教が始ったことから見れば、このようなことはどうでも良いように思われますが、寺院の設立に関しては三種類の説が出てくる訳です。要は、2005年をもって創立50周年とするか、2007年とするか、あるいは2010年をもって創立50周年とするか3つの説が出てくる訳です。

先に小衲が坐禅堂の建立を発願したと述べましたが、実は、坐禅堂の建立は宗門の命脈維持の上からも、人材育成の根本道場としても必要不可欠のものでありますので、歴代総監が等しく発願されたものです。

初代総監の新宮良範老師は赴任して間もなく現在の地に佛心寺を移転し、坐禅堂を備えた建物を整備されております。しかしながら、地下にあり、広さの上から言っても十分とは言えないものでありました。さらに整備をというわけで浄財を募りましたが政情不安により貨幣価値が一夜にして暴落するという憂き目に遭遇し、せっかく頂いた浄財が一夜にして紙屑同然となるの時代の波を受けてしまいました。さらに発奮されている最中に倒れられ病床に臥す身となられました。第二代青木俊享老師は強盗に遭いさらに四大不調となり帰国を余儀なくされました。第三代総監の森山大行老師は現在我々が有り難く使用させていただいている２階建ての建物（１階はホール、２階が本堂）のほかに坐禅堂も視野に入れ建設に取り掛かられていましたが、残念ながら坐禅堂の方は断念されております。前任の三好晃一老師は2001年に壮大な計画を立てられましたが日本で留守を護っておられた奥様が急逝され帰国を余儀なくされました。

このような経過の中、理事会はもとより一般お檀家の方々の長年の夢でもあり、さらに曹洞宗が南米で飛

躍して行くために人材育成が急務であり、それらの基礎となる設備が是非とも必要であるこの時期に、ご縁により浅学菲才の小衲にその任が廻って参ったものです。

まず、将来を展望した建物で、しかも必要最低限度の設備を備えた坐禅堂はと、見積もりを出してもらうと、約2億円と算出されました。どう考えてもこの額はブラジル国内だけではとても賄いきれない額ですので、ブラジルで布教の経験のお有りの神奈川県種徳寺ご住職渡辺孝彦老師を勧募事務局長にお願いし、庶務に福島県月心院住職室井義春師をお願い申し上げました。勧募委員には同安居の方々に厚かましくもお願いいたしたものです。そして勧募趣意書を全国のご寺院様に郵送してご協力をお願い申し上げました。すぐにご賛助賜りましたご寺院様はじめこれまで多くのご寺院さま及びその檀家の方、さらには一般の賛助者の皆様方には衷心より御礼申し上げます。また2006年の宗報4月号に勧募趣意書を掲載させていただき、その後、8月号では郵便振込み用紙を添付させていただき、11月号には勧募状況を掲載させていただき、その後本年も定期的に勧募状況を掲載させていただいております。また全国の宗務所長様にお願い申し上げ、宗務所所会の折に参上して各教区長様にお取りまとめをお願い申し上げたり、あらゆる機会にお願い申し上げておりますが、任地での業務もおろそかに出来ずいまだ親しくお願いにお伺いできないご寺院様がたが殆どです。何卒状況をお汲み取りいただきさらにご芳志賜りたく臥してお願い申し上げます。

坐禅堂を含めた施設の必要性を具体的にご理解いただくために、本年の臘八摂心参加者予定を申し上げますと、地方の村からの日系僧侶のほか、ブラジル国内各州からはもとより、南米ではコロンビア、チリからの参加者があり、ヨーロッパからはスペインの宗侶の参加、北米から国際センターの所長である奥村正博老師の随喜もあり、文字通り遠方から参加してくださいます。しかしながら、宿泊の設備も無いためにホテルから通って行持を勤めていただくという、まことに申し訳ない状況であります。ＳＺＩの関係諸老師はじめ会員の皆様方へ、重ねてのご協賛をお願い申し上げます。

【ペルー南西部地震現地視察レポート】

ペルー南西部沿岸地帯で大規模な地震が起こったというニュースは、8月のお盆の最中15日に報道されたものでした。すぐにも駆けつけてリマの坐禅道場の様子や、慈恩寺の被害状況を確認したいと思いましたが、それも叶わずメールで問い合わせしましたところ、リマの道場の被害は無く、カニェーテの慈恩寺も壁にひびが入った程度だということで一安心しました。しかしながらテレビで見る限り大変な被害であることには変わりないので、9月に予定していたリマでの坐禅会の折につぶさに視察することにしました。

それに先立ち、宗務総長様はじめ関係諸老師のご配慮で曹洞宗からペルーの地震に対して義援金を頂戴することになりました。これにより被災者に対して、心からの哀悼の気持ちと、一日も早い復興への熱い思いが伝わることと、衷心より感謝いたしました。

9月20日、リマに飛び、その足で車で3時間半の距離にある、被害が最も大きいと言われているピスコの街に向かいました。

日干し煉瓦の家は跡形も無くなった

地震から一ヵ月以上が過ぎていましたが現地に近づくにつれその惨状の大きさに息が詰まる思いでした。日本でも報道されたピスコの街に入ったときは本当に言葉を失ってしまったものです。ブラジルから同行のフランシスコ半田師もペルーの禅グループのカスチー

ヤ仙玄師も押し黙ってしまいました。レンガやアドーベという日干し煉瓦の建物が大半のこの街は見る影も無く崩れ去り、瓦礫の山と化していました。155名が亡くなった例の「サンクレメンテ　カトリックの教会」の前に車から降りた私達は、すぐに追悼の読経を行い犠牲者の冥福を祈らずにはいられませんでした。教会は正面の壁だけを残して広場と化し、礼拝堂の部分には大きなテントが張られ、そこでミサをするようになっていました。テントの中に入ることを許可された私達は破壊を免れたマリア像の前で、あらためて教会で亡くなった方々の追悼とペルーの復興祈願の祈りを捧げました。

その後、教会裏の仮設小屋にアルフォンソ神父を訪ね、復興の様子を伺い、援助の方法を話し合いました。周囲に目をやると病院も学校も崩壊し、100メートルくらいの橋は修復のため渡ることが出来ず、車も人も迂回して河川敷を通行していました。

ご存知のように、カトリックのNGOでは、世界中にネットワークを持っている「国際カリタス」がいち早く各国から現地に駆けつけて、炊き出しその他の活動をしていました。（カリタス　ジャパンも日本で義援金の受付をしている）。「国際赤十字赤新月社連盟」（1991年に改称）もスペイン、ドイツ、アルゼンチン、パラグアイから現地入りしていました。またペルーの軍隊もブルドーザーを使っての復旧作業その他を行っており、多くのNGOが仮住まいのテントを張り、仮設トイレを作り、炊き出しをし、精神面のケアの分野など、それぞれ分担し、朝夕代表が集まり作業計画等を話し合うということでした。私は1989年のサンフランシスコの大地震にサンフランシスコ禅センターで遭遇した経験がありましたが、そのときは近代的な大都会での地震でしたので、高架の高速道路が落ち、大火災が起こるという大惨事を眼にしたものの、鉄筋の

ピスコ赤十字社の惨状

入った近代建物のため惨状を感じる度合いは少なかったような気がします。今回は地震から一ヵ月経っても瓦礫の山が片付かないという状況に、発生当時、天井や壁のレンガが頭上に降ってくるという地獄絵図がまざまざと眼に浮かび胸が締め付けられたものでした。

案内してくれたボランティアの方から「街の人たちは気が立っているので、日が暮れる前に早く現場を離れなさい」というアドバイスを受けて、リマに戻りました。帰途カニェーテの慈恩寺に立ち寄り、被害状況を調べ、ここでも追悼と復興祈願の供養をいたしました。（秘露古来震害連　本年亦遇涙雲懸　洞門哀悼如裁骨　供養一灯結化縁）

翌日、以前から連絡をとっていたリマ市内にある国際赤十字赤新月社を訪れ、ルイスローランド南米軍団代表災害救助マネージャーと会談し送金方法について話し合いました。

翌日からリマの郊外で12人の参加者を迎えての摂心でしたが、ピスコの街の惨状が目蓋から離れませんでした。

リマの国際赤十字社にて

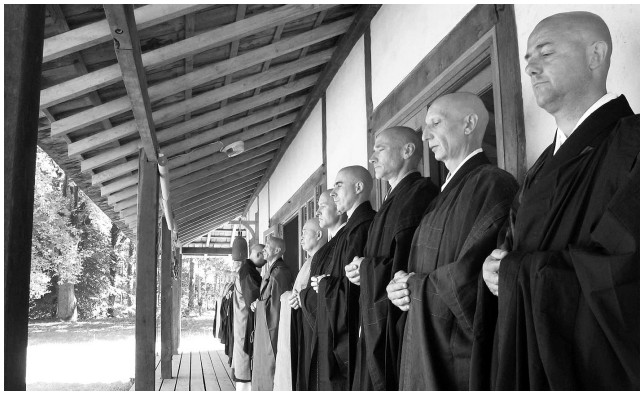
海外インフォメーション

海外宗立専門僧堂が禅道尼苑に開単

ー 山中塗り応量器　ヨーロッパへ ー

2007年9月15日、海外における僧侶育成の一環として、初代ヨーロッパ総監・弟子丸泰仙師が開かれた禅道尼苑に海外初の宗立専門僧堂が開単され、12月15日までの九旬安居が始まりました。この専門道場にて九旬安居期間を終え、申請を行うことにより教師資格が得られます。

開単式には乙川教学部長、宗務庁職員、両大本山、愛知専門尼僧堂、可睡斎専門僧堂、曹洞宗総合研究センター代表などが参加し、盛大に厳修されました。



開単式

開単式集合写真

海外における専門僧堂設置は、第88回通常宗議会における曹洞宗国際布教規程の名称変更及び規定変更が発端となりました。それ以降、海外僧侶資格についての整理統合問題について、海外開教審議会専門部会により調査研究が行われ、2004年に提出された海外開教審議会専門部会答申書により海外における専門僧堂設置が具体的案件となり、現存する世界各地の海外寺院の中で叢林の施設や現地での僧堂運営などの条件を検討した結果、今回の禅道尼苑での宗立専門僧堂開単の運びとなったのです。

海外開教審議会専門部会において、その中心的役割を果たし多大なる貢献をされたのがＳＺＩ相談役であり教化部長であられました故・瀧澤和夫老師でした。瀧澤老師の功績を顕彰し、禅道尼苑境内にある弟子丸師の墓地近くに分骨が埋葬され、記念碑が建立される予定です。師は「ヨーロッパにおける宗立専門僧堂設置がかなったら、次はアメリカに設置したい。そのためにも体調を整え、現地の国際布教師をはじめとする関係諸師の意見や状況をお伺いに必ず出かけていく」とのことばを遺されて御遷化されました（『曹洞宗宗報』平成19年10月号71頁））。改めて哀悼の意を捧げ敬意を表しますとともに、世界各地域における宗立専門僧堂の設置が実現されますことを心待ちにしております。

禅道尼苑は、25万坪の敷地に法堂、典座寮、鐘楼を備えています。さらに、この度の開単に合わせ、20人が坐禅を行じることができる坐禅堂を新たに設置しました。現在、曹洞宗の僧籍をもつフランス、ベルギー、ドイツ、スイスから11人（うち尼僧2人）が開単の年に安居しており、国際布教センターや北アメリカ国際布教総監部からも講師を招聘し、安居期間中の一連の修行は英語とフランス語で行われることとなります。今後も海外僧侶の方々の掛塔が多数見込まれます。

ＳＺＩでは、この開単に合わせて事務局より禅僧用の応量器10組をお届けいたしました。

これは、本年6月にフランス･禅道尼苑において開催されたヨーロッパ国際布教40周年記念行事の際に、ヨーロッパ国際布教総監・今村源宗師より、僧堂で使用する本格的な応量器が入手困難であるので是非幾つか数を揃えて欲しいという要望をいただき、それにお応えする形でＳＺＩ役員会において 支援を決定したことによるものです。

応量器は、ツアーにご参加されていた石川県・崇禅寺様とのご縁により、山中塗りの工房をご紹介いただき発注をさせていただきました。

一つひとつ手作りの製品のため、発注から完成まで2ヵ月ほど掛かりましたが、漆黒の輝きが美しい見事な器として仕上がりました。

この応量器をお届けする事が40年前に弟子丸泰仙師が仏法の種を撒かれたヨーロッパの地における禅修行の中で用いられ、海外僧侶の教師分限規程に規定された資格取得の一助となれば嬉しい限りです。

（文責・亀野哲也　写真提供・ヨーロッパ国際布教総監部）

SZI express

会費納入者・賛助金納入者名簿　2007年7月25日から10月31日まで

◆ＳＺＩ会費賛助金納入者一覧
2007年７月25日～ 10月31日

ありがとうございました。
大切に使わせていただきます。
（敬称略・順不同）

■　会費納入者芳名一覧

秋田県　満福寺　伊藤道人
福島県　恵倫寺
福島県　常在院　長谷川崇信
新潟県　新潟専門尼僧堂
新潟県　　佐藤のり
新潟県　興源寺　田宮隆児
新潟県　名立寺　橘　徹之
静岡県　林叟院　鈴木包一
東京都　　長谷寺
東京都　　菅原研州

■　賛助金納入者芳名一覧

大本山永平寺
大本山總持寺
神奈川県仏教会

動　静　報　告
2007年8月1日～ 12月19日まで

８月６日	会報発行発送作業	事務局
８月９日	ゆめ観音記者会見	鎌倉市役所
８月10日	ゆめ観音鎌倉市広報掲示	鎌倉市内
８月25日	シルクロード音楽の旅演奏会	吉祥院檜コンサートホール
８月30日	宗教間対話研究所例会	檀信徒会館
９月２日	ゆめ観音準備作業	大船観音寺
９月７日	ゆめ観音前日準備	大船観音寺
９月８日	ゆめ観音アジアフェスティバル	大船観音寺
９月９日	ゆめ観音後片付け	大船観音寺
９月20日	宗教間対話研究所例会	檀信徒会館
９月28日	役員会・海外寺院ガイドブック編纂委員会	檀信徒会館
10月３日	案内状発送作業	事務局
10月18日	宗教間対話研究所例会	檀信徒会館
10月19日	ゆめ観音アジアフェスティバル　かながわ民際基金へ義捐金寄付	（財）かながわ国際交流財団
10月30日	役員会・編集会議・海外寺院ガイドブック編纂委員会	檀信徒会館
11月15日	宗教間対話研究所例会	檀信徒会館
11月19－20日	全日本仏教徒会議神奈川大会協力	横浜
11月20日	編集会議	横浜
12月18－19日	役員会・国際布教師ＯＢ会	熱海

インターネットにて随時役員会を開催しています。

SZIホームページ運営中！

会報バックナンバー、過去の総会・講演会、スタッフページを作成いたしました。
また、今号で同封の海外寺院ガイドブックのweb版も、引き続き更新しております。
冊子版とあわせて御覧いただければ幸いです。

URL　http://soto-zen.net

読者メッセージ

岐阜県正宗寺　原田道一老師より、お手紙を頂戴いたしました。
これからも、スタッフ一同精進して参りたいと存じます。ありがとうございます。
合掌

「ＳＯＴＯ禅インターナショナル」ＶＯＬ.35を拝受。最近の出版物で最高の法味でした。
企画から編集までごくろう様でした。今年６月末、田上太秀先生に昨年に引き続き来講願い、飛騨の奥地で般若心経３回のお話をしていただきました。お寺を使わず自由にお話をされました。
これは翻訳されてもよいものです。今回の企画がやはり人脈と歴史と現地での努力の結晶です。
片桐老師を作家ナタリーさんが紹介して全米に、日本も春秋社より出ており、仏での弟子丸師が紹介されたり、黙々とやられた先輩方を拝し、なつかしんでいます。　謝謝

編集後記

執筆者のそれぞれの思いが集まり、それぞれのご縁が重なってこのようなものを残していく場に立ち会える貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。いたらないところは多々ございますが、今後ともご指導いただければ幸いです。　（内山温子）　合掌

2008年SOTO禅インターナショナル
総会・創立15周年記念講演会・懇親会のご案内

日時・会場　2008年2月20日（水）　東京グランドホテル
13：00～ 総　会（3Ｆ 桜の間）
15：00～ 講 演 会（3Ｆ 桜の間）
17：00～ 懇 親 会（6Ｆ パンセ）

講演会講師　野田大燈老師

演　　題　「禅的発想のすすめ」

《講師プロフィール》

野田大燈（のだだいとう）　1946年3月高松市生。

財団法人「喝破道場」理事長
宗教法人「報四恩精舎」住職
社会福祉法人「四恩の里」理事長
厚生労働省認定委託実施事業「若者自立塾」塾長
曹洞宗社会福祉施設連盟理事長
情緒障害児短期治療施設「若竹学園」元園長
大本山總持寺禅カウンセリング研究所元所長
前大本山總持寺後堂

㈶全国青少年教化協議会　評議員　/ 学校法人總持学園　元理事 / 香川県青少年教化協議会　事務局長　/ 香川ナームの会　顧問 / 香川県スポーツチャンバラ協会名誉会長 / 香川県護身道連盟　会長 / 香川県里親会　元会長　/ 香川県レクリエーション協会　元理事 / 国際スポチャン協会四国連絡協議会　元会長 / 県立児童擁護施設「亀山学園」園長

ＳＺＩ 新規会員 募集中

ＳＯＴＯ禅インターナショナルは、会員の皆様と共に運営する「曹洞宗の国際布教」「曹洞禅をとおした国際交流」を推進する団体です。活動に賛同いただき応援してくださる方であれば、どなたでも会員になることができます。また、積極的に企画・運営に協力していただける活力あるボランティア・スタッフも求めています。会員の皆様には、年３回の会報とＳＺＩが企画する講演会・勉強会・フォーラム、また、海外スタディーツアーなどのご案内をしております。年会費は1万円です。

入会をご希望の方は、郵便局窓口より振替用紙に住所・氏名・電話番号を明記の上、年会費をお送りください。ＳＺＩ活動は、相互扶助を実践していこうという会員一人ひとりの「願い」に支えられる「会費」により運営されております。

郵便振替口座番号　00100－6－611195　名義　ＳＯＴＯ禅インターナショナル